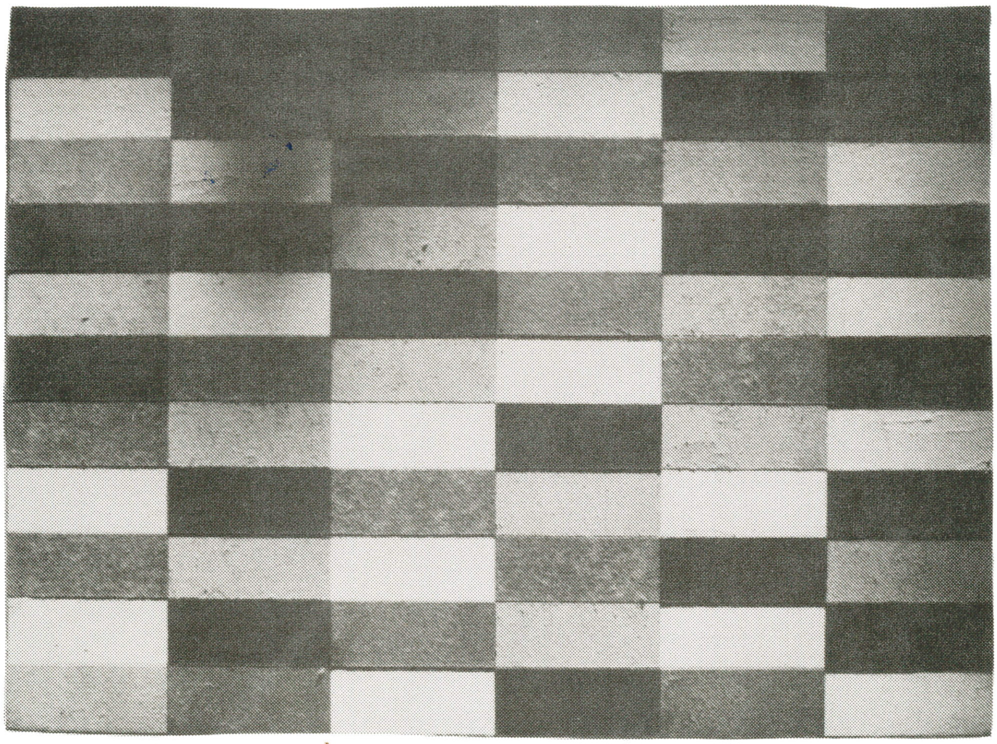
1987年1月15日発行　毎月1回15日発行　1974年1月8日第3種郵便物認可　前　衛 No.319、20

マルクスによる革命綱領観の選択

―フランス社会主義の諸潮流との関わりにおいて―

《寄稿》川上忠雄 法政大学教授



前衛 12、1月合併号 No.319、20

〈寄稿〉川上忠雄 法政大学教授

マルクスによる革命綱領観の選択
—フランス社会主義の諸潮流との関わりにおいて—

はじめに

しばらく前にマルクス歿後一〇〇年を記念する特集がいくつも編まれた。だが、特集のタイトルにも「昔、マルクスがいた?!」が現われたばかりか、論文の内容からすると、マルクス批判の矢がいっせいに放たれた感があった。教条を後生大事にしてのさばっていた人々は、いまやすっかり意気銷沈してしまいかわってマルクスに葬式を出そうとする人々が舞台に躍り出た。そしてこのマルクス批判の合唱は、西欧近代そのものの批判という、より大きな思想的なうねりの中で、近代思想の最後の砦、最高峰としてのマルクス主義の批判へと傾斜していきつつあるかにみえる。

西欧近代としてのマルクスの批判は、たしかにこれまで必ずしも明らかでなかったマルクスの思想の一面を照らし出した。エコロジーならびに人類学に支えられた視点からの批判については、とりわけそういえると思う。しかしそのような批判は、そもそもマルクスが西欧近代の批判者として登場したことをどう扱おうとするのか。この点で私にはどうも領けないところがある。マルクスの思想を無理矢理西欧近代一色に塗りつぶして、みそもくそも洗い流してしまうようなことにならぬために、そして護教の反動としての思想の安易な清算、乗り移りを横行させないためにもマルクスの知的営為を正確に受けとめたうえでの正当な相対化がすすめられなくてはならない、と思う。

この論文は、私自身の、「成長の危機と成長による危機」(本誌三〇七号)につづくマルクス相対化の作業の一里塚である。そのようなものとして、おそまきながらこの私なりの歿後一〇〇年記念論文としたい。

本号の誌面

【寄稿】川上忠雄法政大学教授
マルクスによる革命綱領観の選択
—フランス社会主義の諸潮流との関わりにおいて—
はじめに……2
I、広松—坂本論争……3
II、一八四〇年代……6
III、初期社会主義・共産主義……9
IV、アソシアシオニスム……15
V、マルクスの選択……19
むすび—マルクスの相対化のために……27
表紙のことば……27

表紙　空間工房

I、広松—坂本論争

レーニンの指摘以来、「マルクス主義の三つの源泉」として広く認められているのが、「ドイツの哲学、イギリスの経済学、フランスの社会主義」である。マルクスの相対化ということになると、当然にも、マルクスの思想とこれらの源泉との関係を、従来のような、マルクスを終着点、完結点としてみる視角そのものを改めて、マルクスをも一結節点としてみる新しい視角から洗い直さなくてはならない。これら西欧近代思想(あるいはすでにそれを批判する思想)にいかに対峙したのか、何を吸収し、どこまで批判をすすめたのか—新しい視角からそれらが解明されるにつれて、マルクスの思想の歴史的位置もまた明らかになってくるだろうからである。

フランス社会主義との関連欠落—坂本

ところで、これまでから、ヘーゲル↓フォイエルバッハ↓マルクスの線とスミス↓リカード↓マルクスの線の思想的発展の研究は、ずいぶん蓄積されてきたし、最近になってからはその視角自体にも新しいものが現われている。しかし、フランス社会主義↓マルクスの線は、これまでほとんどつっこんで研究されないまま放置されてきたといえる。このいちじるしい対照! なぜそうなったのか——それ自体が一つの問題であるし、すでにある解答を予想させる事態であるが、一九七〇年代のはじめ、広松渉、坂本慶一両氏のあいだにこの主題にかかわる論争が展開された。

まず、ヘーゲル↓マルクスの線の探究によって今日初期マルクスの思想形成の研究に大きな貢献をしつつある広松氏は、一九六八年「初期マルクス像の批判的再構成」という論文において、かえってつぎのようにフランス社会主義源泉説を否定、あるいは少なくともはなはだしく軽んずる主張をおこなっていた。

『マルクス主義における三つの源泉の総合的統一』という命題は、マルクス主義を思想史的に位置づける命題としてならば依然として正しい。しかし従来の研究者たちの多くは、この命題を以て、同時にマルクス主義の成立事情を示すものと前提し、この図式に当て嵌めて初期マルクスの思想形成過程を追認しようと努めてはこなかったか? ところが、ヘスとの関係はおくとしても、最近の実証的研究が次第に明らかにしつつある通り、『源泉』の一つたるフランス社会主義はマルクス主義の成立過程においては殆んど直接的な影響を及ぼしておらず、初期のエンゲルスが繰り返し強調している通り『ヘーゲル派の哲学を先へ先へと進めることによって共産主義に達した』というのが実情である」(1)。

これにたいして、一九七〇年、『マルクス主義とユートピア』を書いた坂本氏は、論じた。

「総じていえば、初期マルクスの思想形成にとって、フランス社会主義は、たしかに源泉としての役割を果している。いいかえればフランス社会主義はマルクス主義の成立にとって不可欠の歴史的前提をなしている。……自らの課題追求のため悪戦苦闘しつつあった若きマルクスにとって、フランス社会主義は避けて通ることのできない当時の巨大な思想潮流の一つであった。マルクスはこれと真正面から対決しながら、歴史観と経済学の両面において、これを批判・克服することによって自らの思想体系を構築していった。それを可能ならしめたものは、マルクス主義の他の源泉であるドイツ観念論哲学とイギリス古典経済学のマルクスによる批判的摂取であった。……しかしながら、マルクス主義の出発点をなす疎外論についていえば、それはフランス社会主義の思想的伝統であった。……マルクスの労働疎外論は、ヘーゲル—フォイエルバッハの観念的疎外論にフランス社会主義の現実的疎外論を投入し、それらをイギリス古典経済学の『労働概念』をもって総合・止揚したものと考えることができる。」(2)

その彼は、広松の見解に、自分の結論と論証の仕方に対する「前もっての反論」を読みとった。それで、前掲の引用箇所をあげたうえ、「『最近の実証的研究』の成果が示されて

いない以上、広松氏の右の主張を実証するものは何もないといってよい。無知をさらけ出すことになるかも知れないが、わたくしの知るかぎりでは、『初期マルクスの思想形成過程』をフランス社会主義との関連において組織的に追認した仕事は、国内はもちろん、海外においても皆無である。このことは、マルクス主義者を自称する人々の知的怠慢を物語るものではないだろうか」と手厳しく批判したのだった（3）。

「三つの源泉」論の既成観念は誤り—広松

批判を受けた広松氏は、「フランス社会主義と初期マルクス」という論文を書いて答えた。「（前掲の引用文のうち）『最近の実証的研究が……』という条りは、それが『……及ぼしておらずに係るかぎりで、慎んで取下げることにしたい。右の条りを書いた折に、筆者の念頭にあった幾つかの研究書は……影響の無い』ことを積極的に立証したものではないし、事の性質上、それを『実証』することはありえないわけであって、軽率な発言であった。省みて深く自己批判する次第である。また、坂本氏の研究をはじめ、北条喜代治氏、森川喜美雄氏などの研究を学び直すことによって、筆者は今日ではプルードンのインパクトを当時よりも重視するようになっている。しかし、形式的には、上記の一点を除いて、右の一文は依然として妥当性をもつと考える」（4）。

彼は、自説を裏付けるために、ドイツにフランスの社会主義、共産主義をはじめて本格的に紹介したローレンツ・フォン・シュタインの『今日のフランスにおける社会主義と共産主義』（一八四二年九月刊）を取り上げ、「パリ移住以前のマルクスにはフランス社会主義・共産主義の直接的な影響は認められないこと、彼はシュタインの〝紹介〟によるバイヤスをもってフランス社会主義・共産主義について一応の自己了解を遂げていたこと、しかるにパリに移住して程なく、この〝了解〟が禍の一因ともなって、マルクスはフランスの論客たちから冷水三斗を浴びせられる結果に直面したこと」（5）を明らかにした。

そしてこう論ずる。

「『経哲手稿』を書いた時点のマルクスは、フランスの古典的社会主義者たちについて……きわめて知識に乏しかったということ、このような知識水準にとどまっていたとすれば一八四四年前半の時点ではとうてい彼がフランス社会主義から強い思想的影響を受けたとは考えにくいということ、われわれとしてはこのような心証を抱かざるをえない」（6）。

『経哲手稿』におけるマルクスは、……先行社会主義・共産主義が立てた社会革命の構想、社会変革の構想を必ずしも具象的には受けとめておらず、人間主義的に了解した先行社会主義の思想と志向を、いかにもヘーゲル左派の哲学者らしい発想でベグライフェン（理解—編集局注）したという域をいくばくも出ていない。とはいえ、マルクスは、——平等原理の展開というところに理論的・思想的な視軸を据えていたシュタインとは異なって——なかんづく私有財産という〝人間の疎外態〟に留目していること、われわれはこの点に格別の留意を払うべきであろう。労働の在り方の抜本的な再検討、私有財産の止揚、等々マルクスがさしあたり哲学的にとらえかえした案件、……これらの案件そのものは、マルクスが独自に考え出したものではなく、それはさしあたり、——たとえシュタインを介してであれ——先行社会主義・共産主義思想から知識として受容したものであった。この限りで『経哲手稿』時点におけるマルクスの思想形成は、フランス社会主義・共産主義の存在、それについての一定の知識をぬきにしては語りえない。しかしながら、われわれはここでの〝影響〟を過大に評価してはならない。……『経哲手稿』が案件として受けとめた程度の当該の知識はシュタインの〝いかがわしい紹介〟で事足りる所以である」（7）。

そして、一八四四年秋に執筆された『聖家族』においては、プルードンとの面識をつうじて、経済学そのものの批判によるプルードンの限界の乗り越えを課題として設定するようになるが、ブリュッセルへの移住（一八四五年二月）後、『ドイツ・イデオロギー』執筆にとりかかるまでに、フランス社会主義・共産主義関係の諸著作を本格的に読んだ形跡はまったくみられない。「『ドイツ・イデオロギー』の〝第二巻〟つまり『真正社会主義者たちに対する批判』の個所を書くにあたって、マルクスがフランス社会主義の文献をファースト・ハンドでかなり立入って読んだことは確実である。……しかし、当の作業がおこなわれたのは、〝第一巻〟において既にマルクス主義的共産主義理論が一応の確立をみたあとの時点に属する。」（8）

けっきょく、「マルクスの共産主義理論、すなわち、いわゆる『科学的社会主義』は——

プルードン

蜂起するベルリン市民（三月革命）

彼が固有の経済学理論を構築するに際して先行する経済学の諸説に対しておこなったような詳細なアウスアイナンダーゼッツング（分析—編集局注）を先行社会主義に対しておこなうことを通じて確立されたものではなく——ヘーゲル左派的な視角から一定のバイヤスをもって〝了解〟した先行社会主義・共産主義の〝基本的モチーフ〟を独自の発想で基礎づけていくことを通じて確立されたものであって、フランス社会主義は、マルクス主義の成立過程において、人口に膾炙しているような意味での『源泉』をなすとは認定しがたい……マルクスの共産主義思想は、——結果的に比較してみればたとえそうみえる契機を含むにしても——先行社会主義思想から一連の命題や範式を受容し、それを深化・敷衍するという仕方で確立したものではないということ、成立過程に関する誤った既成観念からマルクス主義の発想と地平がフェルケネン（誤解—編集局注）されがちな現状に鑑み、敢えてこの（それ自体としてはトリビアル〔平凡—編集局注〕な）論点に固執する次第である。」（9）

関連性の究明こそ相対化への道

論争はこれで決着がついたのであろうか。

たしかに、広松氏は、「初期マルクスの思想形成過程」をフランス社会主義との関連において検討することで、「マルクス主義者の知的怠慢」という坂本氏の批判に答えている。そしてその答の中から、フランス社会主義に対するマルクスの関係が、みずからの思想的出発点であり、したがってそこから脱け出して自立するための対決を必要としたドイツ観念論哲学に対する関係とも、また先行する諸説に対する詳細な分析をつうじて確立された古典経済学に対する関係とも、異なるものであったことが鮮明に浮かび上がっている。「ヘーゲル左派的な視角から一定のバイヤス（ずれ—編集局注）をもって〝了解〟した先行社会主義・共産主義の〝基本的モチーフ（主題—編集局注）〟を独自の発想で基礎づけていくことを通じて確立された」というのは、マルクス共産主義理論とその形成過程の重要な一面をいい当てている。事程さようにマルクスのバイアスは強かったのだ。

だが広松氏は、この一面に固執することでマルクスの精神にとってパリ滞在（一八四三年一〇月～四五年二月）がシュトルム・ウント・ドラング（疾風怒濤—編集局注）の思想形成の時代であったことを意識的にか軽くみているように思われる。そしてそれは、突きつめると、坂本氏が強調したかったポイント——フランス初期社会主義の歴史的地位への無理解と密接に関係していると考えられる。しかもこの無理解とは、私には、広松一人のものではなく、マルクス主義者に共通するもの、いや、もっと突っこんでいうと、マルクス主義者に共通するものと思われるのである。エンゲルスのユートピア社会主義規定、いや『共産党宣言』そのものの社会主義、共産主義文献評価にしたがってフランス社会主義を理解していれば、そうなるのもむしろ当然のことというべきだろう。いかにバイアスをもって了解したにせよ、パリ滞在以降のマルクスは、当時ほかのどの国にもそれほどまでに開花していなかったフランスの社会主義、共産主義諸派の理論的諸命題、そしてそれらと密接な関わりをもってすでに展開しはじめていたフランスの労働運動の諸相の吟味をつうじてはじめて、みずからの共産主義理論を形成しえたのではあるまいか。広松氏は、芸を細かく、「〝基本的モチーフ〟を独自の発想で基礎づけていく」という作業と「一連の命題や範式を受容し、それを深化・敷衍する」という作業を区別したつもりかも知れない。だが、こと社会運動理論の形成ということになると、ドイツ観念論はほとんどその能力を欠いていた（マルクス自身の、自己批判をこめた「真正社会主義批判」は一体なにを示すのか？）。したがって、まずもって重要なのはマルクス自身、坂本氏のいうような重い意味で、フランスの社会主義、共産主義と対決することなしに、「ヘーゲル派の哲学を先へ先へと進める」ことが果してできたのかどうか、を明らかにすることであろう。

けっきょく、広松の方が、マルクス主義者の常識となっている、フランス初期社会主義の等閑視ないし軽視——それはマルクス主義者の現代に至るまでの、イギリスはじめ先進諸国労働運動への無理解、とくにその階級性についての理解困難へつながっている——の延長上にある。その意味で、坂本の批判に真に答えることができていない。私にはこう思えて仕方がない。私自身、じつはちょっと前まで源泉としてのフランス社会主義とのマルクス主義の関係について無知で、軽んじてきた。しかし、いま私には、この関係の解明によってこそ、マルクスの共産主義の特質とその限界もきわめて鮮明になるように思われる。マルクスの共産主義は、三つの源泉をもってしても、けっして最終的な「総合的統一」などではなかった。たしかに三つの源泉を総合する巨大な思想的営為が認められる。しかしそのそれぞれの源泉については、マルクスは

総合統一というよりは、強烈な「バイアス」をもって取捨選択をおこない、さらに「独自の基礎づけ」を与えたのである。マルクスの共産主義は、そのようなものとして、やはり一つの思想にほかならなかった。広松氏の指摘というのも、このような相対化の方向の緒口として生かすことができるであろう。

（1）　広松渉『マルクス主義の成立過程』一九六八年、五—六ページ。
（2）　坂本慶一『マルクス主義とユートピア』一九七〇年、一六五—一六六ページ。
（3）　同右、一六七ページ。
（4）　広松渉「フランス社会主義と初期マルクス」（上）、（『現代の眼』、一九七一年四月号）二五ページ。
（5）　広松渉「フランス社会主義と初期マルクス」（完）、（『現代の眼』、一九七一年七月号）一九六ページ。
（6）　同右、二〇一ページ。
（7）　同右、二〇六ページ。
（8）（9）　同右、二〇九ページ。

II、一八四〇年代

一八四八年のフランス二月革命とその後につづくヨーロッパ大陸全土の政治的社会的激動は、ヨーロッパがこの間吸収、蓄積しつづけてきた二つの大きな革命の衝撃を社会表面にいっきょに噴き出させるものにほかならなかった。民衆が舞台に決定的に登場した。それは一つの時代の終りであると同時に、一つの時代の始まりをも画した。終ったのは神聖同盟の反動的均衡の時代であり、始まったのは進歩と変化、ナショナリズムの時代である。そして一八四〇年代は、ヨーロッパの社会経済と政治が歩度を速めてこの二月革命とその後の激動へと高まっていた時期にほかならない。

フランス大革命と産業革命

二つの大きな革命——それは、いうまでもなく、フランス大革命と産業革命のことである。

フランスの大革命は、その自由、平等、友愛の合言葉そのものがヨーロッパ大陸全土に測り知れない思想的社会的衝撃を及ぼしつづけた。そればかりか、フランスに現実に展開された共和国と革命独裁のドラマは、賛成するにせよ反対するにせよ、以後ヨーロッパのすべての国々のいっさいの政治的社会的運動が、そしてまたその運動に立ち向かう政府が対面し対決しなければならなかった範例となった。

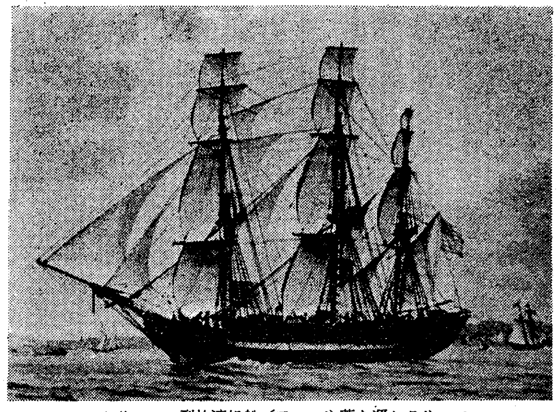
他方、イギリスにはじまった産業革命は、機械をそなえた工場を出現させた。それによって農村社会への商品経済の浸透と小生産者の分解をいっそう強力に推進しつつ、工業都市を登場させた。こうしてその工場の内外で社会的生産に関わる人間関係を広い範囲で根本から変革し、さらに人々の生活様式、価値観をも革命的に変化させる衝撃を及ぼしつづけた。産業革命によるこの社会関係、生活様式、価値観の変化は、近代的な諸階級、そしてその階級対立を生み落とした。階級と階級対立の出現は、いうまでもなく、政治的社会的運動の性格を、そしてまたその主体を大きく変化させることになった。労働者階級と社会主義、共産主義の登場である。

労働者階級は、一つには、熟練を持ち、ギルド規制の伝統を引いた旧来の手工業職人、いま一つには、食いつめて流民化した農民の中から生まれ出た。

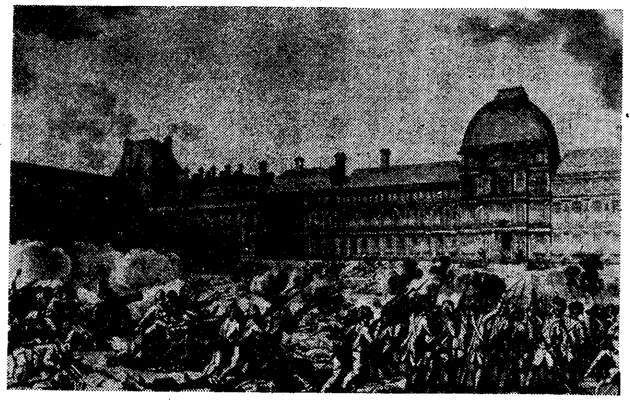
労働者階級は、むろん、最初から明確な境界線によって旧来の手工業職人や農民から截然と区別された存在ではなかった。世界市場の成立以来、ヨーロッパ各地で、まず、ギルド規制から多かれ少なかれ自由になったさまざまな小手工業者たち、あるいはまた農業からなかば以上離脱した工業的農村の自由な手織工などの小手工業職人たちが、流通面からしだいに強まる商人資本の支配を受けて、おそくとも一八世紀に入ると、つぎつぎに事実上の賃労働者と化していった（1）。これまで家父長的な愛情と義理の関係に結ばれていた親方と職人、従弟の関係も、親方自身の両極分解にともなって、冷たい現金関係にかわりはじめ、事実上の賃労働者化がすすんだ。

他方、これとは別に、商品経済の急激な浸透、共有地の囲いこみ、高い年貢などのために、農村の分解がすすみ、大量の流民が都市へ流れこんで、スラムに貧民として堆積しはじめた。かれらはほとんど熟練を要しない、雑多な手仕事や物売りによって日銭を稼ぎ、あるいは盗みによって辛うじて糊口をしのいだ。生い立ちを異にするこれら二つの賃労働者グループのあいだには無数の中間形態があったことはいうまでもない。しかし、かれらのあいだには、幾層にも区分された職業としての貴賤の別が厳然として存在していた。

産業革命の開始とともに、イギリスを先頭にして、これら賃労働者たちの相当部分が織維工場へ吸収され、機械の相手をすることになり、機械的な規律のもとにおかれていった。いまや雇主と被雇用者の関係は、決定的に短期の現金関係となった。そして蒸気機関の導入によって工場自体が特定都市へ集中するとともに、かれらは都市の工場労働者として確立したのであった。生い立ちを異にする賃労働者の二つのグループは、ともにこの近代都市工場労働者の形成に参加した。伝統的な誇り高き手工業職人たちは、工場が必要とするがまだ機械化の困難な分野か、あるいはその熟練を多かれ少なかれ解体され、機械を前提とする熟練へと格下げされた分野へむかってであり、また貧民たちは、そのほとんどが新しくつくりだされたさまざまな、熟練度の低い、あるいは熟練を要しない仕事へむかってであった。しかし、かれらの周囲には、依然として、手工業的職人と脱農化した貧民の膨大な層が刻々増大をつづけ、いっそうはっきり賃労働者化して、またいっそう都市へ集中して存在したのである。



クリッパー型快速帆船（アヘンや茶を運ぶクリッパーにはじまり，1870年平均速力14ノットに達した）



八月十日の王宮襲撃

以上は、よく知られた教科書的な説明である。しかし、労働者階級の形成といっても、じつは以上のスケッチにはもう一つ決定的に重要なタッチが加わらないと魂が入らない。

労働者階級の登場とは賃労働者そのものの出現ではない。賃労働者そのものなら遠く中世から存在していた。またそれは、たんなる賃労働者数の増大とも同じではない。そこには社会のある成員グループ——賃労働者層を、一括して、単一の階級と理解する認識作用が加わらなければならなかったからである。

一七七〇年代から一八三〇年代へ先頭をきって進行したイギリスの産業革命の過程で、労働者階級の概念はいつ頃、どのような脈絡で成立したのであろうか。

産業革命前の社会はまだ身分社会であり、ピラミッド型の身分のハイアラーキー（位階制——編集局注）と一般民衆（コモン・ピープル）、あるいは身分秩序の底辺に一般民衆という構図で社会構成が理解されていた。その身分を表現するのに用いられたのは、オーダーズ、ランクスであり、ディグリーズであった。ハイアー・アンド・ロウアー・オーダーズという表現である。クラスは社会構成の区分に用いられた例がまったくなかったわけではないが、むしろ生物の分類などに用いられていた。したがって、社会構成の区分としてはランクなどに比べて意味の明瞭でない言葉であったとはいえ、それがまた産業革命以降の新しい現実の、鋭い、より普遍的な区分を表現するのに好都合だったようである（2）。

労働者階級概念の成立

このクラスという言葉がはじめて近代的な階級の意味で用いられるようになるのは、フランス大革命の衝撃によって上層身分の地位権力が脅かされ、慣習的義務が乱れたさい、その自覚を促がすために一七九〇年代から用いられたハイアー・クラセズであった。これに、対仏戦争中政府が課した所得税への不公平感からこのハイアー・クラセズに対する誇りの自覚を持った、新興の「勤勉な」ミドル・クラセズがつづいた。すでにアダム・スミスの『国富論』（一七七六年）には、「土地所有者」、「資本所有者」が、オーダーあるいはインタレストとして登場していた。それらが階級的自覚をもって使われだしたわけである。もっとも、身分のある者たちはクラスという言葉を嫌い、あいかわらずランクとかオーダーとかに固執する傾向を示した。これに対し新興の製造業者たちの上に対する対自的な階級的自覚は、一八三〇〜三二年の選挙法改正のアジテーションの最中に頂点に達した。彼らの物指しは財産の額と種類であった（3）。

ワーキング・クラセズは、「勤勉な」（インダストリアス）、「生産的な」（プロダクティヴ）階級として、民衆全体をひっくるめて「勤勉でない」「非生産的な」上流階級に対抗させようとした、この中流階級に対して、自分たちの独自のアイデンティティーを〈働く〉ことに求めようとした人々によって、一八一〇年代からぼつぼつ使われはじめた。オーウェンは、一八一六年、ワーキング・クラセズを著書の題のキー・ワードとして使った（4）。上流、中流という呼び名は当然に下流（下層）という呼び名を予想するものであり、またじっさいにも使われるようになったが、それに飽きたらず、かれら独自の物指しを持ちこんだわけである。経済学者の側では、リカードオが、一八一七年、『経済学および課税の原理』の冒頭で、土地生産物の分け前に関して、「「土地所有者」「資本所有者」「労働者（レイバラーズ）」の三階級を挙げた。労働者たちの少なくともその運動参加者たちの資本家に対する対自的な階級的自覚は、一八三〇年代初頭の選挙法改正運動と選挙権に必要な財産資格の引下げへの中流階級の妥協——それまで連携の手をさしのべていた労働者たちに対する裏切りという顛末によっていや応なく高まった。そして一八三六年からはじまった反穀物法同盟とチャーチストの対抗の一〇年——それは「不況の三〇年代」から「飢餓の四〇年代」へのもっとも困難な時代でもあった——こそ、双方がなんの躊躇もなく階級の利害を口にした時代であった（5）。

この頃までにすっかり都市に定着した労働者たちは、同じ職種ごとに居酒屋（パブ）でともに飲み、語り、相談し、冠婚葬祭や不時の出来事に扶けあう、兄弟のように親密な仲間としての生活スタイルを醱酵させていった。それは、社会空間に固有の領域を画するかれらの独自の文化の形成であった。そしてほからの独自の生活圏の創出であり、独自の文化の形成であった。そしてほかでもない、この仲間との結びつき、独自の生活圏、文化をベ

ースにして労働運動、すなわち生産から消費にわたる広範な協同の試みや、新しく対極に登場してきた資本家階級に対する異議申し立てと反抗、さらに普選の憲章を求める政治運動もまた生まれてきた。

近代的な社会主義、共産主義は、それぞれ異なった思想的源から生まれながら、まさにこの独自の生活圏、文化をベースにした労働運動と相即的に、資本主義社会の根本からの批判、労働者階級の解放の思想として定位し開花したのであった。

ところで、これらの階級は、単数でなく複数で、労働者のばあいは〈労働者階級〉として用いられはじめた。この事実は軽々しく見過すことのできない重要な意味を秘めている。

そこには、物事を理論的に理解しようとして強度の抽象力を駆使した経済学者は別格として、三大階級という普遍的な階級概念の成立がなかなか困難であったことが示されている。その困難は、たんなる観念操作上のものでなく、現実に存在する社会諸グループの抽象、一般化を容易に許さぬ多様性、そして境界のあいまいさによるものであったといえる。労働者のばあい、多様な階級が存在しつつ、それが〈働く（ワーク）〉という一点で共通に結びつけられ、その限りで親愛感、連帯感をもって理解されたのである。

しかし、中流（あるいは資本家）諸階級と労働者階級の利害の対立がクローズ・アップされ、とりわけ政治がその対立を一つの軸として動くようになると、それぞれの内部の差異を消去し、同一性、連帯の面を当然の義務ないし理念として主張する心性が強く働くようになるといえる。単数の階級はこの心性の産物であった。じっさい、一八三〇、四〇年代に単数のワーキング・クラスの使用がひんぱんに行われるようになった。

単数の〈労働階級〉はこうしてようやく市民権をえた。だが、差異を消去し、同一性、連帯を理念として主張するこの心性には、無理がともなっていたことも否めないようである。現に二月革命にともなう激動が去り、チャーチズムが退潮すると——それはイギリスにおいては産業革命とそれにともなう苦痛に満ちた社会的再編の終了とも符合した——ふたたび社会の主要な関心は、三大階級よりも、無数の社会的等級の区分の方へ移行してしまう（6）。そして運動家たちの口からも一転して、熟練労働者と不熟練労働者とのあいだに橋をかけることの絶望的な困難をこぼすつぶやきがもれてくることになるのであった。

パリを彩ったさまざまな思想

さて、社会の相貌を真に一変する、このような大きな衝撃を受け、社会的思想的エネルギーを蓄積しつづけた一九世紀前半のヨーロッパの中心となった。

新しい資本主義社会の確立の先頭に立っていたのは、いうまでもなく、イギリスである。しかし、イギリスでは、世界市場の獅子の分け前をさえ、社会的再編の先頭に立っていたというまさにその理由から、変化はいち早くしかし長期にわたって比較的ゆるやかにすんだ。大革命においてフランスが当面することになる諸問題をも、イギリスは一世紀以上前のピューリタン革命においてすでにほとんど経験済みであった。ただしフランスほどには突きつめない形においてである。したがって、フランス大革命そのものがイギリスではいわばすでに卒業した出来事であり、大陸諸国においてのように歓迎されることとはならなかった。そして、産業革命の発祥の地となったイギリスには、すでに一九世紀初頭に紛れもなく労働者階級が登場し、一八三〇年代には産業革命のもたらす社会的緊張は頂点に達したのであった。したがってまた、団結禁止法撤廃、主従法制定、選挙法改正、工場法、救貧法改正など一連の立法によって、新しく出現した社会への政策的対応もすすめられた。

このイギリスにおいて、近代的共産主義の源流と目されるレヴェラーズ、ディガーズたちは、遠くピューリタン革命のゆきずまった時点から出発していたし、オーウェンをはじめ労働者に基盤を置く社会主義的な思想と運動ももっとも早く、一八一〇年代から現われている。しかし、それらはいちじるしく経験論的で、資本主義社会総体に対決するような壮大な体系性を欠き、思想としての昇華度の比較的低いものにとどまったのである。

そしてなによりも一八四〇年代のイギリスは、すでに深刻な窮乏と社会的再編もすでに峠を越えていた。順調な資本蓄積の中心となり、ますますふくらむ世界市場の獅子の分け前を前提としながら、いち早く労働者と労働運動を社会的、ついで政治的に体制内へ包摂する方向への転機に立ち、すでにその第一歩を踏み出していたのである。この面でもイギリスは一足先に卒業しようとしていた。

これにひきかえ、フランスの大革命は、絶対王制の強度、思想の昇華度、運動の民衆性それに資本主義からのはみ出し度など、あらゆる意味において突きつめた大革命であった。大革命はどの国よりもここフランスにおいて時代精神を枠づけた。フランスの社会運動とその思想は、大革命をどう批判的に評価し、これにどういうスタンスをとるかを明らかにしないでは存在しようがなかった。バブーフ

サン・キュロット

の共産主義がそのはじまりである。この思想風土上に、フランスの産業革命は、大革命直後、イギリスからの技術導入をもって緒につき、一八二〇年代に入って本格化した。労働者階級とその運動も一八三〇年代にははっきりと現われてきた。そして、いち早くイギリスの諸変化を見聞きしながら、したがって自国の労働者階級とその運動の出現にほぼ同時に並行して、フランスの社会主義思想が生まれ出たのである。それらとは、大革命が実現したと目される社会総体との対決を理論的に突きつめた思想的昇華度の高いものとなり、しかも同時に色濃く終末論的ユートピア性を帯びていた。

一八四〇年代こそは、フランスにおいて、労働者階級とその運動のたしかな形成を背景に、急速に高まる社会的緊張を感じつつ、夢の豊かなこれらの社会主義、共産主義思想が文字通りいっせいに競い咲きした時代であった。しかもそれらが二月革命へむけて多かれ少なかれ労働者の運動に結びつき、じっさい社会を動かす力となった時代であった。フランスは、こうした二つの革命の衝撃が社会的思想的にたっぷり貯めこまれたうえで爆発的に噴き出す中心となったのである。

イギリスとはまさに正反対に、大陸の他の国々、たとえばドイツでは、大革命そのものがなおこれから実現されるべき理念であった。それは、賛成するにせよ反対するにせよ、強烈なバイアスをもって理解される理念であった。いわば市民革命の入学以前だったのである。そのうえ、産業革命も一八四〇年代に入ってようやく本格化する。したがって、一八四〇年代にはまだ労働者階級とその運動はしかと登場してはいなかった。機械をそなえた大工場はまだ限られていたし、それればかりかその前段の手工業職人の賃労働者化の過程もまだ不徹底だった。そして城壁をもった都市の伝統ある職人層と城壁の外に堆積した貧民層とのあいだには、容易に越えることのできない心理的な壁が存在していた。ここでもイギリスの新しい産業社会の見聞は拡まり、さらにつづいてフランスの社会主義、共産主義諸思想も伝わってきた。その刺激のもとに一八四〇年代には社会主義、共産主義諸思想が現われてくる。しかし、それらはまだたしかな現実の担い手、主体を欠いていたといえよう。それらはなんとも内容の貧しい、哲学的ゲップのようなものにとどまったのである。

ともあれ、このような社会的思想的成熟をもって、ドイツは、いわば社会の全成員でもって二月革命を受けとめ、きわめて敏感に反応し、連動することになるのであった。

（1）J・ルール、「職人の態度——一八四八年前における熟練労働とプロレタリア化の比較」（労働史研究会『会報』五〇号、二三ページ。

（2）A・ブリッグズ、「一九世紀前期のイギリスにおける〈階級〉という言葉」（同、編『労働史エッセイ』）四八〜四九ページ。

（3）同右、五八ページ。

（4）オクスフォード英語辞典。

（5）A・ブリッグズ、同上論文、四九ページ。

（6）同右、六九ページ。

Ⅲ、初期社会主義・共産主義

一八四〇年代のパリはまさに社会運動とその諸思想のるつぼであった。そこにはあらゆるタイプの社会主義思想がそろって姿を現わし、競い咲きした。

フランスでは、一八二〇年代以降、政治革命に飽きたらず、それ以上のもの——社会そのものの変革を唱えた〈社会的な（ソシアル）〉な思想がつぎつぎに現われたが、それらは一八三〇年代以降、〈社会主義（ソシアリスム）〉と総称されるようになった。そのようなものとして、共産主義も含まれた。しかし、この時代にはじめて登場する狭義の社会主義と長い歴史をもつ共産主義とは、異質な起源、異質な性格をもつ思想であった。

社会主義思想はいずれも「自由・平等・友愛」の大革命をいかに総括するか、を思想上の鍵としていた。

平等派の陰謀―バブーフ、ブランキ

革命のいっそうの推進の立場からの大革命の批判的総括は、いち早くロベスピエールの失脚とともに始まった。

最初に登場したのは、みずから「平等の友」を名乗ったG・バブーフ（一七六〇—一七九七）であった。

近代共産主義の祖と目されるバブーフは、テルミドールの反動下に、大革命を下から支え推進したサンキュロットたちの理念と運動を継承し徹底させて、共産主義の理論にゆきついた。

バブーフらは、大革命が「国民の繁栄を……市民のあせり勝ちで飽くことを知らぬ貪欲の中にあるとする」生産の騎士たちの「エゴイズムの体系」に流れていることを批判し、「正直なつつましさ」をそなえた「平等の体系」を対置した（1）。そして「共有の管理」によって「共同の幸福」を実現する社会を求めた。そのベースとなるのが、私的所有を否定した「財産の共同体」であり、農業を主とし手工業を従とする「労働の共同体」であった。

バブーフの共産主義は、大革命が現実にもたらしたものを否定的に理解し、一八世紀啓蒙思想に内在した分岐を極点にまで煮つめることによって成立したものということができよう。

大革命を思想的に準備したフランス一八世紀の哲蒙思想の中には、自由を第一に掲げ、

ースにして労働運動、すなわち生産から消費にわたる広範な協同の試みや、新しく対極に登場してきた資本家階級に対する異議申し立てと反抗、さらに普選の憲章を求める政治運動もまた生まれてきた。

近代的な社会主義、共産主義は、それぞれ異なった思想的源から生まれながら、まさにこの独自の生活圏、文化をベースにした労働運動と相即的に、資本主義社会の根本からの批判、労働者階級の解放の思想として定位し開花したのであった。

ところで、これらの階級は、単数でなく複数で、労働者のばあいは〈労働者階級〉として用いられはじめた。この事実は軽々しく見過すことのできない重要な意味を秘めている。

そこには、物事を理論的に理解しようとして強度の抽象力を駆使した経済学者は別格として、三大階級という普遍的な階級概念の成立がなかなか困難であったことが示されている。その困難は、たんなる観念操作上のものでなく、現実に存在する社会諸グループの抽象、一般化を容易に許さぬ多様性、そして境界のあいまいさによるものであったといえる。労働者のばあい、多様な階級が存在しつつ、それが〈働く（ワーク）〉という一点で共通に結びつけられ、その限りで親愛感、連帯感をもって理解されたのである。

しかし、中流（あるいは資本家）諸階級と労働者階級の利害の対立がクローズ・アップされ、とりわけ政治がその対立を一つの軸として動くようになると、それぞれの内部の差異を消去し、同一性、連帯の面を当然の義務ないし理念として主張する心性が強く働くようになるといえる。単数の階級はこの心性の産物であった。じっさい、一八三〇、四〇年代に単数のワーキング・クラスの使用がひんぱんに行われるようになった。

単数の〈労働階級〉はこうしてようやく市民権をえた。だが、差異を消去し、同一性、連帯を理念として主張するこの心性には、無理がともなっていたことも否めないようである。現に二月革命にともなう激動が去り、チャーチズムが退潮すると──それはイギリスにおいては産業革命とそれにともなう苦痛に満ちた社会的再編の終了とも符合した──ふたたび社会の主要な関心は、三大階級よりも、無数の社会的等級の区分の方へ移行してしまう（6）。そして運動家たちの口からも一転して、熟練労働者と不熟練労働者とのあいだに橋をかけることの絶望的な困難をこぼすつぶやきがもれてくることになるのであった。

パリを彩ったさまざまな思想

さて、社会の相貌を真に一変する、このような大きな衝撃を受け、社会的思想的エネルギーを蓄積しつづけた一九世紀前半のヨーロッパの中心となった。

新しい資本主義社会の確立の先頭に立っていたのは、いうまでもなく、イギリスである。しかし、イギリスでは、世界市場の獅子の分け前をさえ、社会的再編の先頭に立っていたというまさにその理由から、変化はいち早くしかし長期にわたって比較的ゆるやかにすんだ。大革命においてフランスが当面することになる諸問題をも、イギリスは一世紀以上前のピューリタン革命においてすでにほとんど経験済みであった。ただしフランスほどには突きつめない形においてである。したがって、フランス大革命そのものがイギリスではいわばすでに卒業した出来事であり、大陸諸国においてのように歓迎されることとはならなかった。そして、産業革命の発祥の地となったイギリスには、すでに一九世紀初頭に紛れもなく労働者階級が登場し、一八三〇年代には産業革命のもたらす社会的緊張は頂点に達したのであった。したがってまた、団結禁止法撤廃、主従法制定、選挙法改正、工場法、救貧法改正など一連の立法によって、新しく出現した社会への政策的対応もすすめられた。

このイギリスにおいて、近代的共産主義の源流と目されるレヴェラーズ、ディガーズたちは、遠くピューリタン革命のゆきずまった時点から出発していたし、オーウェンをはじめ労働者に基盤を置く社会主義的な思想と運動ももっとも早く、一八一〇年代から現われている。しかし、それらはいちじるしく経験論的で、資本主義社会総体に対決するような壮大な体系性を欠き、思想としての昇華度の比較的低いものにとどまったのである。

そしてなによりも一八四〇年代のイギリスは、すでに深刻な窮乏と社会的再編もすでに峠を越えていた。順調な資本蓄積の中心となり、ますますふくらむ世界市場の獅子の分け前を前提としながら、いち早く労働者と労働運動を社会的、ついで政治的に体制内へ包摂する方向への転機に立ち、すでにその第一歩を踏み出していたのである。この面でもイギリスは一足先に卒業しようとしていた。

これにひきかえ、フランスの大革命は、絶対王制の強度、思想の昇華度、運動の民衆性それに資本主義からのはみ出し度など、あらゆる意味において突きつめた大革命であった。大革命はどの国よりもここフランスにおいて時代精神を枠づけた。フランスの社会運動とその思想は、大革命をどう批判的に評価し、これにどういうスタンスをとるかを明らかにしないでは存在しようがなかった。バブーフ

サン・キュロット

の共産主義がそのはじまりである。この思想風土上に、フランスの産業革命は、大革命直後、イギリスからの技術導入をもって緒につき、一八二〇年代に入って本格化した。労働者階級とその運動も一八三〇年代にははっきりと現われてきた。そして、いち早くイギリスの諸変化を見聞きしながら、したがって自国の労働者階級とその運動の出現にほぼ同時に並行して、フランスの社会主義思想が生まれ出たのである。それらとは、大革命が実現したと目される社会総体との対決を理論的に突きつめた思想的昇華度の高いものとなり、しかも同時に色濃く終末論的ユートピア性を帯びていた。

一八四〇年代こそは、フランスにおいて、労働者階級とその運動のたしかな形成を背景に、急速に高まる社会的緊張を感じつつ、夢の豊かなこれらの社会主義、共産主義思想が文字通りいっせいに競い咲きした時代であった。しかもそれらが二月革命へむけて多かれ少なかれ労働者の運動に結びつき、じっさい社会を動かす力となった時代であった。フランスは、こうした二つの革命の衝撃が社会的思想的にたっぷり貯めこまれたうえで爆発的に噴き出す中心となったのである。

イギリスとはまさに正反対に、大陸の他の国々、たとえばドイツでは、大革命そのものがなおこれから実現されるべき理念であった。それは、賛成するにせよ反対するにせよ、強烈なバイアスをもって理解される理念であった。いわば市民革命の入学以前だったのである。そのうえ、産業革命も一八四〇年代に入ってようやく本格化する。したがって、一八四〇年代にはまだ労働者階級とその運動はしかと登場してはいなかった。機械をそなえた大工場はまだ限られていたし、そればかりかその前段の手工業職人の賃労働者化の過程もまだ不徹底だった。そして城壁をもった都市の伝統ある職人層と城壁の外に堆積した貧民層とのあいだには、容易に越えることのできない心理的な壁が存在していた。ここでもイギリスの新しい産業社会の見聞は拡まり、さらにつづいてフランスの社会主義、共産主義諸思想も伝わってきた。その刺激のもとに一八四〇年代には社会主義、共産主義諸思想が現われてくる。しかし、それらはまだたしかな現実の担い手、主体を欠いていたといえよう。それらはなんとも内容の貧しい、哲学的ゲップのようなものにとどまったのである。

ともあれ、このような社会的思想的成熟をもって、ドイツは、いわば社会の全成員でもって二月革命を受けとめ、きわめて敏感に反応し、連動することになるのであった。

（1） J・ルール、「職人の態度──一八四八年前における熟練労働とプロレタリア化の比較」（労働史研究会『会報』五〇号、二三ページ。
（2） A・ブリッグズ、「一九世紀前期のイギリスにおける〈階級〉という言葉」（同、編『労働史エッセイ』）四八〜四九ページ。
（3） 同右、五八ページ。
（4） オクスフォード英語辞典。
（5） A・ブリッグズ、同上論文、四九ページ。
（6） 同右、六九ページ。

Ⅲ、初期社会主義・共産主義

一八四〇年代のパリはまさに社会運動とその諸思想のるつぼであった。そこにはあらゆるタイプの社会主義思想がそろって姿を現わし、競い咲きした。

フランスでは、一八二〇年代以降、政治革命に飽きたらず、それ以上のもの──社会そのものの変革を唱えた〈社会的な（ソシアル）〉な思想がつぎつぎに現われたが、それらは一八三〇年代以降、〈社会主義（ソシアリスム）〉と総称されるようになった。そのようなものとして、共産主義も含まれた。しかし、この時代にはじめて登場する狭義の社会主義と長い歴史をもつ共産主義とは、異質な起源、異質な性格をもつ思想であった。

社会主義思想はいずれも、「自由・平等・友愛」の大革命をいかに総括するか、を思想上の鍵としていた。

平等派の陰謀―バブーフ、ブランキ

革命のいっそうの推進の立場からの大革命の批判的総括は、いち早くロベスピエールの失脚とともに始まった。

最初に登場したのは、みずから「平等の友」を名乗ったG・バブーフ（一七六〇―一七九七）であった。

近代共産主義の祖と目されるバブーフは、テルミドールの反動下に、大革命を下から支え推進したサンキュロットたちの理念と運動を継承し徹底させて、共産主義の理論にゆきついた。

バブーフらは、大革命が「国民の繁栄を…市民のあせり勝ちで飽くことを知らぬ貧欲の中にあるとする」生産の騎士たちの「エゴイズムの体系」に流れていることを批判し、「正直なつつましさ」をそなえた「平等の体系」を対置した（1）。そして「共有の管理」によって「共同の幸福」を実現する社会を求めた。そのベースとなるのが、私的所有を否定した「財産の共同体」であり、農業を主とし手工業を従とする「労働の共同体」であった。

バブーフの共産主義は、大革命が現実にもたらしたものを否定的に理解し、一八世紀啓蒙思想に内在した分岐を極点にまで煮つめることによって成立したものということができよう。

大革命を思想的に準備したフランス一八世紀の哲蒙思想の中には、自由を第一に掲げ、

理性の統治を唱えるヴォルテールと、平等を第一に掲げ、社会契約を説いたルソーという二つの流れがあり、さらにルソーに半分重なるようにマブリ、モレリら共産主義の思潮も存在していた(2)。バブーフ自身、ルソー、マブリ、エルヴェシウス、モレリを自分の師と認めている。不平等への憎しみがルソー以上にはげしいバブーフにあっては、ルソーの重視した「個人の値打ち」の観念が消滅してしまっている(3)。機械的な唯物論にひかれた点でもかれは啓蒙思想の子であった。いずれにせよバブーフは、啓蒙思想そのものから出て新しい独自の歴史観、社会観の構想へとむかうには至っていなかった。

共産主義は、じつは、私有財産と貨幣を憎み、根絶しようとする共産制（コミュノーテ）つまり共同体原理主義の思想であり、プラトンの『国家』や原始キリスト教以来、共同体社会が解体の危機に陥り、民衆が苦しむ時代にはきまって噴き出してきたのであった。バブーフの共産主義も色濃くそれらとの共通性に彩られていた。そしてじつはまだ社会主義という言葉そのものが生まれていなかったのである。バブーフの共産主義は社会主義登場前の共産主義ということになる。しかし、バブーフの共産主義にはこれまでにない近代的な性格が萌していた。それはまず、バブーフの共産主義が機械を否認することなく、勃興しつつあるリベラリズムに対抗しようとしていた点であろう。

だが、バブーフの共産主義を真に特徴づけそれに決定的な近代性を刻印したのは、その革命論であった。

バブーフらは、「もう一つの革命　最後の革命」として真の社会革命を唱えた。そして、議会内でのモンタニアール派の凋落、街々のセクションの保守化という、主体の二重の無力化の情勢のもとで、サンキュロットたちの国会議員を当てにした「平和的な蜂起」がくり返し失敗するのをみて、「民衆自身による権力掌握」の観念に到達した。その指導部となる秘密結社を組織し、陰謀によって民衆の武装蜂起を準備する道を考え出したのである。その旗印は、〈一七九三年憲法〉〈平等〉〈共同の幸福〉であった。さらに、蜂起成功の暁には過渡的な革命独裁を置いた。「自然的秩序から遠ざけられている民衆は、有効な選択をする能力をほとんど持っておらず、完全な主権を擬制的でなく実質的に行使しうる状態に彼らを置きかえるには異常な手段が必要なのである」（4）。まず社会制度を改め、民衆を啓蒙することが先決。没収などによって革命政府直轄の「国民共同体」を創設し、全国的規模での共同生産、配分を開始する。それをモデルとして拡げてゆく。そして「真の平等が樹立された時には、利害の多様性と対立は絶滅するであろう」（5）。

ブランキ

かれの革命論は、大革命の政治指導部、ジャコバン派公安委員会およびロベスピエールとサンキュロットたちとのあいだに生じた不幸な亀裂の止揚をめざすものであった(6)。ジャコバン派とサンキュロットたちはともにルソーの信奉者であったが、じつは当初から国家と民衆のあり方について意見の相違を伏在させていた。それがやがて公安委員会独裁さらにはロベスピエール個人独裁の是非をめぐる深刻な対立として表面化したのであった。テルミドールの反動のもとで、その解決は、現実に可能な革命の方式の発見と並んで、最重要の課題であった。

バブーフ

「民衆自身の権力」の「革命独裁」がどこまでその解決たりえたのか――それは新たな難問のはじまりであったかも知れない。しかし、バブーフによって原型を与えられた永続革命、秘密結社―陰謀―武装蜂起、そして革命独裁の革命論は、後世に絶大な影響を及ぼすのである。もっとも、バブーフのばあい、まだその主体は、小手工業者、小商人、職人らが未分化で混然一体となっていたサンキュロットであった。労働者階級（クラス・ラヴリエル）という言葉もすでに使われていたがその内容はサンキュロットそのものを指していたのである（7）。

流刑からもどったブオナロッティが『平等派の陰謀』を著わしてからネオ・バブーフ派が結集し、一八四〇年代には、あいかわらず共有制に力点を置いた機関紙『友愛』（フラテルニテ）を発行していた。

これとは別に、バブーフを継承して共産主義を唱えたのが、L・A・ブランキ（一八〇六～一八八一）であった。

ブランキも私有財産制へのはげしい批判の立場をとった。富は人間の知力と労働という二つの力が土地という受動的な要因に働きかけることによって生み出される。にもかかわらず、土地も生産物も労働者に属しておらず無為の人々に属しているというのである(8)。そしてかれもまたバブーフにならって秘密結社―陰謀―武装蜂起の道を選んだ。かれの主要関心も社会の性格、そして国家そのものを問う方向にはむかわず、ひたすら蜂起の技術の探究に集中され、それにかかわるかぎりで社会、国家が視野に入ったにとどまった。ただかれのばあい、主体は未分化なサンキュロットからプロレタリアへ移行していた。ただし、かれのばあい、プロレタリアはいまだ労働者と農民を一括した概念であった（9）。

一八三九年、季節社の蜂起は失敗に終った。しかし、こうした秘密結社による原理主義的な地下運動としての共産主義は、その後も潜在的影響力を失ってしまったわけではない。二月革命が起ると、たちまちブランキを中心に「中央共和協会」（通称「ブランキ・クラブ」）が生まれ、政治化し街頭化したパリ民衆の中に急速に影響力をうばうことになる。ただ、ブランキ自身は、そのさいただちに蜂起の準備にむかうというのではなく、共和制を「仕事とパン」を保証するものへと発展させようと腐心することになるのであった。

友愛のアソシアシオン－サンシモン

これに対して、産業革命、したがってたんなる市民社会でなく資本主義社会の出現という事態にいちはやく敏感に気づき、しかもそれをより肯定的に評価しながら、大革命の総括も新しい角度からおこなって、社会変革の構想を語ったのが、サンシモン派、フーリエ派、それにカトリック的なビュシェ派、それにテムネーなど社会主義の思想家たちであった。

社会主義は、共産主義とは異なり、まったく近代的な、資本主義社会に固有なその批判思想として、一九世紀初頭イギリスに、ついでフランスに生まれたのである。

バブーフと同年生まれでやはり大革命に参加したH・ド・サンシモン（一七六〇～一八二五年）は、長い思想的遍歴を経て、ようやく一八二〇年代に、普遍的なアソシアシオンとしての〈産業体制〉を構想する。かれ独自の〈アンデュストリアリスム〉（産業主義）に到達した。

醗酵させるのに時を要したが、やはり啓蒙主義の子として神なきあとの統一原理の探究から出発したサンシモンは、自然科学同様実証にもとづいた「人間の科学」「社会生理学」を志した。そして有機体としての社会とその進歩、とりわけ階級と階級闘争――これらを融け合わせた壮大な決定論的歴史観を創造した（10）。

人間社会は有機体であり、したがって生まれ、成熟し、死滅する。ところで、成熟と支配の最高期にある　階級こそが有機的文明の様態を規定する。社会の性格を知るには支配階級の基本的衝動を解明すればよい。歴史は諸階級の闘争である。これまで社会体制は、多神教と奴隷制から「神学的」イデオロギーと封建制へ移行し、さらに今日「科学的」イデオロギーまたは「実証的」精神と「産業体制」へと移行しようとしている。新しい体制の諸要素は、古い体制が生命を終えてからでなく、それがまさに頂点に達した時に生まれる。今日の階級対立は「産業者」と「無為の者」とのあいだにある。この階級闘争は、産業的科学的体制の勝利に終るであろう。それは「最後の体制」であり、それへの移行は歴史の必然である。ここでは現世的幸福、友愛のアソシアシオン、喜びを与えるもろもろの財貨の生産のいっそうの発展がもたらされる。

サン・シモン

搾取はなくなり、階級闘争は消滅するであろう。しかし、移行期には有機的な体制そのものとは異なった性格があり、とくにその末期は破壊的な「批判の時代」となる。社会は敵対的な諸階級の激しい抗争を経験しなければならない。

ここからサンシモンは大革命を批判し、かれ自身の処方箋を書いた。大革命は、「法律家と形而上学者」の指導によって批判と破壊をおこなったにとどまる。「革命をやったのは、けっして産業者ではない。それはブルジョアである。」ブルジョアとは、かれのばあい、「貴族でなかった軍人、平民であった法学者、特権をもたなかった年金生活者」のことである。「今日ではブルジョア階級は、貴族階級として産業者階級の上にのしかかっている。」（11）それゆえ深刻な危機にある。「革命はまだけっして終っていない。」産業者はみずからを第一の階級に高め、科学者（および芸術家）と協同して「産業体制」を平和的に建設しなければならない（12）。

この「産業体制」は組織された社会であり「社会の高度な管理」を実現する。主権をもつ立法＝執行機関である議会（科学者、芸術家たちの企画院、審査院と現役の産業家たちの代議院）が、所有についての法律を生産的企業に有利なように修正したうえで、計画の企画、審査、執行にあたる。「社会の高度な管理」は、なんの特殊な素質も才能も要求しないし、また通常の社会的諸職務の監督に当っている人々以外のいかなる専門職員も要しない。それには統治の専門家とか管理に熟練した者は一切必要ではない。かつて人々は支配されたが、ここでは人々は管理されるだろう。かつて人々は命令されたが、ここでは指導される。産業社会の魅力はすべての成員が「コルポラトゥール」（協同者）であるという事実にある。旧社会には暴力があったが、新社会には諸能力の「協同」、真のアソシアシオンがある。

ただし、サンシモンのばあい、所有は能力に結びついたものであり、基本的には生産の刺激要因と考える（13）。したがってかれは大革命による土地分配を肯定した。かれの「社会の高度な管理」は、当然にも、商品と貨幣いや企業―利潤までも前提としたものでありかれのアソシアシオンも、共産主義者の描く私有財産と貨幣を完全に閉め出したコミュノーテとは異質なものにほかならなかった。この意味では、サンシモンは自由・平等・友愛の大革命が現実に生み出したものへの肯定的理解に立っていたということができる。

だが、サンシモンの反面は、啓蒙主義、ジ

ャコバンの諸価値の手きびしい否定であった。自由は、過渡期の戦術であったが、文明の新しい時代の究極の目標たりえない。そして単純な機械論や原子論と結びついた、本性上も権利上も平等という一八世紀的人間観も、有機体論による個体性、多様性の強調に道を譲るべきであった(14)。かくてサンシモンのアソシアシオンは、のちにみるような三つの自然的階級に属し、指導者のもとに能力に応じてピラミッド型に組織された、非類似的な人々の、友愛の協同と調和となるはずであった。

しかも、この壮大な社会変革において政治変革の影は薄い。たしかに、独創的な主権議会が組織されるが、産業者は、自分たちのもつ圧倒的な人口、物質的力、知性、管理能力などによって、急激な社会変革をおこなうのに必要な手段をすべてそなえているというのだ(15)。したがって、説得がすべてである。そして王はシンボルとして残されるが、国家の支配の機能は無用である。このように大革命であれほどまで焦点となった国家権力はかすんでしまっている。そしてこれまた新しく生まれ出た社会主義を根本から特徴づけるものにほかならなかった。

ところで、サンシモンのいう〈産業者〉とは何者だったのか?

「産業者とは、社会のさまざまな成員の物質的欲求または好みを満足させる一つあるいはいくつかの物的手段を、生産しあるいはこれを彼らのもとにとどけるために働く人である。……彼らは、農業者、製造業者、商人と呼ばれる三大階級を形成する」(16)。肉体労働者と企業の経営者はまだ一括されて産業者であった。そのかわり、その外側にブルジョアがとらえられていた。

しかし、サンシモンに経営者と区別して労働者をみる問題意識がなかったわけではない。かれは当初、大革命の暴徒やラダイトを、真の階級的性質にしたがった「産業者」としてでなく、「無知なプロレタリア」として行動する労働者とみた(17)。だが、一八二〇年以降「私の企ての直接のねらいは腕による労働以外には生活手段をもたない階級の境遇をできるだけ改善することである」と書き、さらに未完の草稿、「プロレタリア階級」(ラ・クラス・ド・プロレテール)においては、「産業者階級の全成員相互間を結びつける、言ってみれば結合の感情、仲間の感情というものがある」はずなのに、「産業者階級の指導者」の状態のみが良くなり、プロレタリア階級の境遇は進歩の割に改善されていないことへの不満を主題とするに至ったのであった(18)。

なお、こうして産業の指導者たちへの距離をも強く感じるようになったサンシモンが生涯の最後にゆきついたのは、きわめて終末論的な『新キリスト教』であった。

サンシモンの死後、弟子たちは、一八二八年から二九年にかけて、連続講演によって師の思想の集大成を試みた(19)。そこでサンシモンの思想は資本主義の現実に即してより具体化されて示された。しかし、同時に、魅力的でもあった師の思想の曖昧さが失われ、サンシモン派は以後分解傾向を示した。アンファンタンを中心とする人々は、かれを救世主とする一種の終末論的な新興宗教へ走ったし「信用の組織化」を説いたペレール兄弟はロスチャイルド家に入り、一八四〇年代にはすでにクレディ・モビリエの構想を暖めはじめていた。

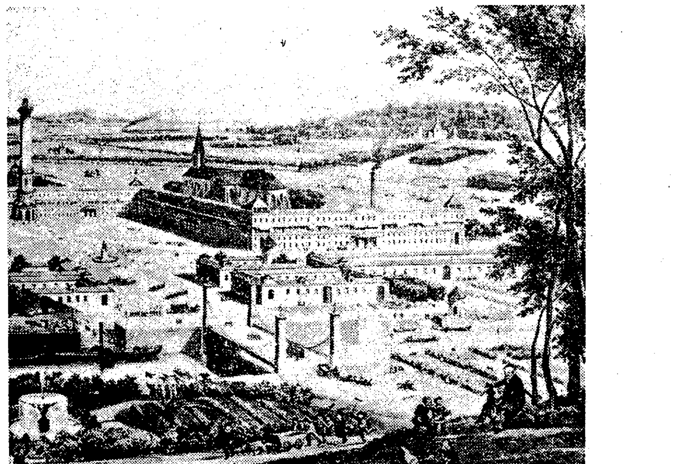
友愛とファランステール―フーリエ

C・フーリエ（一七七二〜一八三七）は、フランスのもっとも発達した商工業都市リヨンに住み、独得の「情念引力の理論」をもって完全なアソシアシオン、〈ファランステール〉を構想した。

フーリエもまた啓蒙哲学、理性、文明、無神論の批判にむかった。哲学者という言葉はかれにあって侮蔑語以外の何物でもなかった。代りにかれの提出したのが、「情念引力」と「「物質的、有機的、動物的、社会的という四運動間のアナロジー」という「確実な学問」であった。すなわち、すべての天体の社会には情念引力が支配するが、この法則はニュートンとライプニッツによって解明された物質引力の諸法則に合致し、物質界と精神界とに通ずる運動体系の統一が存するというのである。

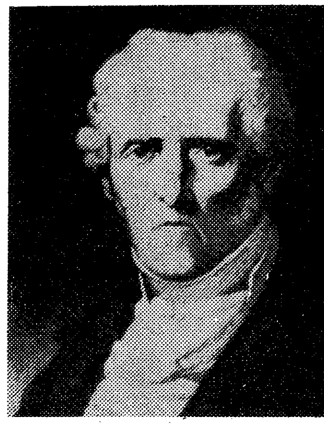
ともあれ、「情念引力の理論」もまた壮大な決定論的歴史観を提供した(20)。

人類の生存はほぼ八万年の期間におよぶが社会の生涯は、上昇振動――「第一段階、幼年または上昇不統一」、「第二段階、生長または上昇結合」、下降振動――「第三段階、衰退または下降結合」、「第四段階、老年または下降不統一」の四段階にわかれる。不統一または社会的不和は不幸時代、結合または社会的統一は幸福時代にあたり、後者は前者の七倍の期間である。そしてわれわれはいま、第一段階にいるが、「運動法則の発見のおかげで、第二段階へ入ろうとしている。」第一段階そのものが、幸福の片影を残した、累進系列に組織された原始社会、つまり「混成系列」から、ふたたび累進系列が組織され、幸福の曙光が射す「粗成系列」へ至る七期を含んでいる。累進系列社会は誘引するという性格をもつ。しかし中期の五期には、人口の過剰増加、殺戮手段の発明、収奪の横行などからセクトが解体し、結婚が生まれ、不統一家族による分割がおこなわれた。



フーリエの理論によってフュージェールが構成し，ドビィニュイが描いたファランステール風景（部分，パリ国立図書館蔵）

不統一家族に組織された「不実、不正、束縛、貧苦、革命」身体虚弱」の社会であり、反撥するという特性をもっている。



フーリエ

幸福な第二段階への移行は、人類の情念が統一性を獲得することによっておこなわれる。

「統一性とは、個人が自らの幸福を周囲のすべての人の幸福に一致させ……ようとする傾向である。これこそは無限の友愛であり、普遍の厚意である。」それは、人類のすべてが三つの基本情念――奢侈、集団、系列に応じて、裕福になり、自由になり、公正（配分的正義）にならないかぎりは発展しえない。

後に一八二〇年代になってからその具体化としてフーリエが呼びかけたものこそ、農業組合からヒントをえたファランステールの組織にほかならなかった(21)。

今日の労働は嫌悪感を催すものであり、七つの根本的欠陥――(1)汚い仕事場、(2)労働者の孤立、(3)未分業状態、(4)連続就労、(5)謀議や競争心の欠如、(6)栄誉の欠如、(7)社会的行為への加担の欠如に染まっている。しかし、ファランステールのなかで、労働はそれらと正反対の諸条件のなかでおこなわれ、喜びに変わる。一八〇〇人をもって構成される単位ファランジュにおいて、労働は家事、農業、製造業、商業、教育、研究、芸術の七つの大系列に分けられ、さらに細分される。細分されたそれぞれの業務を担うのは、個人ではなく、労働者の系列、つまり小さな同職組合（コルポラシオン）の合併した」労働者の集団である。「ファランジュにおいては、あらゆる業務が情緒的な傾向および職務にたいする共通の嗜好によって結合した諸集団によって遂行される。」「自然は人間を嗜好、能力、信条そして天性の面で平等につくったのではないが、すべての系列のリストのうちどれを遂行すべきかを一八〇〇人の性格の取合せのうちから見出すことを保証される。」そして、不可避的に生じてくる不和、対抗をも系列の利益へ活かしていく。友愛と統一が合言葉となる。

フーリエのばあい、エゴイズム、さらには自由競争の商業の「放縦」への批判がきびしい。しかし、かれにあっても、所有そのものはかならずしも否定されてはいなかった。所有に対する情念は人間の本性に含まれているのであり、それは労働あるいは生産を活気づける、もっとも強力なテコの役割を果すものと考えられていた。所有が一つの悪になるのは、それが一般的な利益をさまたげる恣意的な権利となるときであり、したがってかれは、社会本位の所有、ファランジュにおける「複合所有」を主張した。そこではアソシアシオンによって個人的、人格的所有が保障され、貧者と富者の和解も実現するはずであった(22)。あらゆる情念、契機が原理的に否定されるかわりに、解放され友愛の統一へともたらされるわけである。

また、フーリエにおいても、政治変革の影は薄い。というより、無関心のうちに消失してしまっていたという方がよいかも知れない。ファランステールの実現は、まったく説得によって、実験的ファランジュの創設とその成功による教化によっておこなわれるはずだったからである。

フーリエ派の活動は、師の空想的歴史観をカッコに入れたうえで、一八三〇年代に入って大きな影響力をもつようになり、機関紙『ファランジュ』を発行した。もっとも、四〇年代に入ると、コンシデランは、機関紙の名を『デモクラシー・パシフィック』に変え、るとともに、所有権に対抗して「労働権」を唱え、議会政治へ進出していった。

社会的カトリシスム―ビュシエ、ラムネ

秘密結社フランス・カルボナリの結成に参加、ついでサンシモン派に名を連ねたP・J・B・ビュシェ（一七九六〜一八六五）は、しだいに自立し、一八三〇年代には社会的カトリシスムのビュシェ派を糾合するに至った。

ビュシェの思想は、社会的共和主義とカトリック的友愛の原理を結合したものであった。

ビュシェにとって、「大革命はわれわれの父親たちが自発的に耐えしのんだ壮大な悪であった。民族の多くは、共通の義務として、また来たるべき世代の安寧のために、キリスト教が教える自由、平等、友愛を実現しようと望んだ。しかし、利己的で、概して唯物論的な啓蒙哲学の門弟である指導者たちによって大革命は流血、略奪、冒瀆、中傷などで汚された。そして今日、エゴイズムと無限の欲望の充足をめざす「物質的幸福」の追求とがまかりとおっている」というのである(23)。

キリスト教の立場から社会主義を説いたビュシェは、他の社会主義者たちからかけ離れた立場にいたわけではない。サンシモンもフーリエも、いちじるしく終末論的なキリスト教を説いた。大革命に批判的な社会主義思想は、その創成の過程において、カトリックや保守主義の思想と微妙に交錯していたのである。もっとも、サンシモンは教会組織をはげしく攻撃したし、ビュシェも教会の統制下に入ったのではむろんない。

さて、社会主義の二人の祖たちの思想がまだ創造的混沌の状態にあったのにひきかえ、七月王制下のビュシェは、もはや壮大な歴史観を語りはしない。そのかわり労働者階級の像がぐんとはっきりし、と同時に、その解放のための運動論もぐんと具体的になった。

ビュシェの眼は、「都市民衆の大部分を構成する労働者階級の悲惨」に焦点を合わせた。かれは、その悲惨が競争に駆り立てられた企業主たちによる賃金の切下げと機械の使用による熟練の無用化にあることを見抜いたうえで、「直ちに実現可能だと思われる二つの計画」を提案した。アソシアシオン（協同組織）と「労働の組織」がそれである（24）。

〈労働者階級〉は二つの部類に分かれる。「かなり長い養成期間を必要とする職種に携わり」「熟練が基本的な資本で、生産設備をほとんど必要としない」「自由な労働者たち」と

「工場や機械に縛りつけられたり、土地に拘束されている者たち」である。後者は、「印刷工や捺染版製造工といったものだけを除いた工場労働者」である。「これら二つの異なる立場の必要を満たすには、二種類の制度が適当であるように思われる。」「自由な労働者たちの状況を改善するためには、商取引に誠実さと善意を取り戻すためには」アソシアシオンによって、資本家として介在する請負業者を消滅させるだけで十分である。アソシアシオンは、協同者たちが、その職種での慣行にしたがって報酬を受け、純益の1/5ずつが「譲渡されえず、解消されえない社会的資本」として蓄積される、共済機能をもった生産協同組合である。その実現を妨げるのはクレディットの欠如であり、したがってそのための銀行設立が課題となる。しかし、工場労働者たちの大部分はこの体系のなかに入ることはできない。ここでは、「政府の意志が不可欠である。」政府任命の委員によって主宰され、「同僚によって選ばれた職工長と製造業者の代表からなる」サンディア（管理委員会）もしくは労資調停審議会を各県ごとに設置し、これが賃金額を決定する。異議あるばあいには、解決のため仲裁人が召集される。

かれの描く「カトリック的な産業体制」というこのユートピアへの移行もまた、政府に重要な役割を期待してはいたが、基本的には労働者階級自身への説得と実例による教化に依存していた。

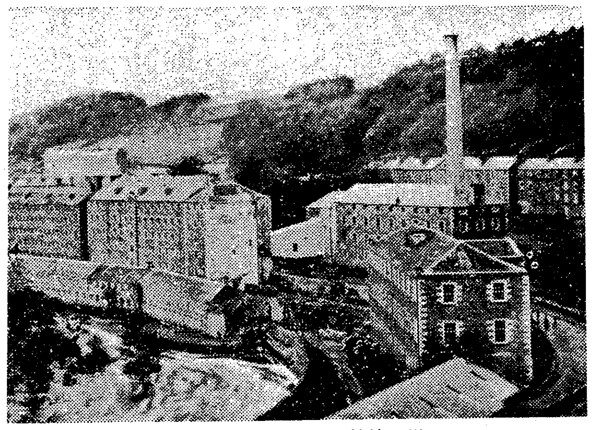
なお、カトリック司祭のF・ド・ラムネー（一七八二～一八五四）も、独自に、自由・平等思想のなかに福音書の理想の実現をみた。

しかし、他の社会主義、共産主義を批判し、自由の実現には、所有および政府、立法、管理への参加という二つの条件が必要であることを指摘した。理性ばかりか、歴史全体が、「プロレタリアが自分に欠けている所有をつくりあげ、かくして自己の解放を完成させる」ことを求めていると説いた（25）。

イカリア共産主義ーカベ

一八三九年ロンドン亡命から帰国したE・カベ（一七八八～一八五六）は、『イカリア旅行記』によって合法的共産主義者として再出発した。

一八三九年の「季節社」の蜂起失敗は、共産主義者たちの秘密結社による政治運動の希望を打ち砕いたことは否めない。政府当局のその後の若干の自由化ともあいまって、そこに共産主義思想にももう一つの合法的なタイプの発展の余地が生まれていた。カベは数年のうちに合法的大衆的な共産主義運動を組織することに成功した。


ニュー・ラナアックの紡績工場

カベもまた、平等と友愛、つまり民主主義の原理で社会を組織するには財産の共有制が不可欠であることを説いた。かれが描いたユートピア、「イカリア国」は統一的・平等主義的・友愛的・共有制的社会、つまり全体性と統一と共有制に基礎をおく社会」であった。そこにおいては「われわれは、財産も貨幣ももっておらず、物を売ったり買ったりすることもありません。……われわれはすべて平等に共和国あるいは共同体のために働いています。大地と工業のすべての生産物を集め、それをわれわれに平等に分配してくれるのは共和国あるいは共同体です」あらゆる生活必要品の量が、毎年共和国あるいは共同体によって確定され、製造される。というのも、すべての産業と工場は国有であり、すべての労働者が国家に所属しているからである。「このように意志決定と命令の主体となっている共和国、その内実は、産業委員会、国民代表議会人民それ自体にほかなりません」（26）。

けっきょく、カベは、この「イカリア国」のイメージにもとづいて、全職権を横断的に市町村、区、県といった単位ごとにアソシアシオンに組織し、それらの統合する「総合的アソシアシオン」を提起したのである（27）。

だが、このユートピアの実現は、「暴力や強制によって即座に起こりうるようなものではなく、説得や確信や国民の意志の力によって継続的に、漸進的にのみ起こりうるものである」としたところにかれの独自性があった。カベはイギリスのオーウェンの影響を強く受けていたし、フランスにおける社会主義と労働者の運動の台頭をもはや無視することはできなかったのであろう。しかし、かれのばあい、この漸進的な変革は社会運動それ自体によって遂行されるのではない。「すべては法律によって」なのである。そのかぎり、やはりルソーの一般意志の忠実な継承者にほかならなかった。

共同体原理主義として、社会から私有財産と貨幣を一掃してしまおうとする共産主義思想には、いずれも、大革命と啓蒙思想の真にラジカルな批判に欠けているところがあった。その分国家そのものに対する批判が甘く、けっきょく共同体としての統一、友愛を、国家による友愛、統一と等置してしまうのである。「イカリア国」は細密画のようにくわしく描かれた共産主義ユートピアであったが、それは、すべての人が同じ服装で、同じ構造の家に住み、共和国が認める以外の食物は消費できないなど、個性を抹殺した画一主義を社会主義者や労働運動家から批判されないわけにはいかなかった。もっともエタティスムの傾向のいちじるしい共産主義であった。

ともあれ、一八四一年に創刊されたカベ派の機関紙『ポピュレール』は、主に職人労働者のあいだに購読者をえて、二月革命直前に発行部数じつに五〇〇〇に達していた。しかし、革命独裁を志向するグループの分裂がくり返して起こり、政府からの迫害も強まったため、一八四七年、カベ自身が「イカリア移住宣言」を発して、この派の活動はアメリカ合衆国にイカリア国を創設するための移住へと向けられていった。

（1）　ブオナロッティ『平等派の陰謀』I、二六ページ。（柴田三千雄『バブーフの陰謀』に引用）
（2）　一八世紀の共産主義については、アンドレ・リシュタンベルジュ『一八世紀社会主義』（野沢訳）、岩本勲『フランスにおける革命思想』を参照せよ。
（3）　柴田三千雄、前掲書、二三九―二四三ページ。
（4）　ブオナロッティ、前掲書、二一二ページ。
（5）　同右、一七三ページ。
（6）　バブーフ派そのものがじつは一枚岩ではなくこの亀裂の止揚をサンキュロットの側からめざしたバブーフたちと、ジャコバン左派、ロベスピエールの側からめざしたブオナロッティらの創造的な結合であった。その点についての柴田三千雄前掲書、第六章の分析は鋭い。
（7）　柴田三千雄、前掲書　三四一ページ。
（8）　佐藤茂行『プルードン研究』四六ページ。
（9）　L・A・ブランキ「プロレタリアのいっさいの希望は共和制に存す」（河野健二編『資料フランス初期社会主義』）二〇六ページ。
（10）　以下の要約は、主としてF・マニュエル『サン―シモンの新世界』（森博訳）下、第一九～二七章による。
（11）　サンシモン『産業者の教理問答』（高木暢哉訳）七ページ　一三および三五ページ。
（12）　最晩年の『文学・哲学・産業論集』（F・マニュエル前掲書下、五三〇ページ）には、「変革はだしぬけに、直接的手段によっておこなわれるべきである」と書いてはあるが。
（13）　佐藤茂行『プルードン研究』三五ページ。
（14）　F・マニュエル　前掲書下　第二三、二四章。
（15）　サンシモン『産業者の教理問答』（高木訳）一四―一五ページ。
（16）　同右、七ページ。
（17）　F・マニュエル　前掲書下　四六八ページ。
（18）　吉田静一『サン・シモン復興』二六二―二六五ページ。ただしサンシモンは、プロレテイルという実体詞を用い、プロレタリアという集合詞は用いない。（F・マニュエル　前掲書下、六六六ページ、注4）
（19）　バザールほか『サン―シモン主義宣言』（野把訳）。サンシモン派のその後の行動については、S・シャルレティ『サン＝シモン主義の歴史』（沢崎浩平・小松隆男訳）をみよ。
（20）　以下はフーリエ『四運動の理論』上下（巖谷国士訳）の予説および第一部の要約である。
（21）　以下のファランステールの説明は、のちのフーリエ派の論客P・フォレの『労働の組織化、フーリエの理論にもとづく』（河野健二編『資料フランス初期社会主義』所収）による。
（22）　佐藤孝行　前掲書　四〇ページ。
（23）　ビュシェ「『フランス革命議会史』第三二巻序文」（河野編『資料フランス初期社会主義』所収）より。
（24）　以下はビュシェが書いたと目される「都市賃金労働者の境遇を改善するための方策」（河野健二前掲書所収）による。
（25）　F・ド・ラムネー「人民の過去と未来について」（河野健二　前掲書所収）一一三ページ。
（26）　E・カベ『イカリア旅行記』（河野健二　前掲書所収）一六六ページ。
（27）　谷川稔『フランス社会運動史』七一ページ。

Ⅳ、アソシアシオニズム

さて、七月王制下に生まれ出たばかりの労働者階級は、パリに咲き競った社会主義諸思想の影響を受けながら、どのように自分たちの運動を展開したのだろうか。

専門に研究していない私にはとても答えられる課題ではない。しかし、幸い、喜安朗氏や谷川実氏のすぐれた研究、それに二月革命直後のパリの産業調査を収録した『資料フランス初期社会主義』が、ラフなスケッチを描くことを可能にしてくれる。

労働者階級ーその歴史的態様

パリは一八四六年に百万をこえた大人口をもつ首都、しかもロンドンと違って工業を集積した首都であった。その商工会議所が一八四八年におこなった産業調査（1）は、パリの労働者三一万弱の構成、性格を明らかにしてくれる。

この報告は、労働者をつぎの四つの主要なグループに区分けしている。

1、「建設現場で働く労働者、あるいは大部分の建設労働者」――石切工、石積工、大工、木びき工、建具工など。

2、「大規模製造工場の広い作業場で仕事する労働者」――紡績、染色、布地プリント工など、壁紙製造工、機械工、ボイラー製造工など。

3、「パリ特有の加工工場、すなわち小規模な作業場で働く労働者」――パリ製の小間物、金銀宝石細工など。

4、「多くの場合自分の部屋で針仕事に携わる労働者」――靴屋、仕立屋、縫製業、下着製造業、刺繍業、婦人帽子屋など。

これらのうち3のグループの労働者たちは四・六万人（印刷工を加えると六・一万人）をかぞえるが、かれらこそ児童の頃から正式の徒弟見習いを経て高度の熟練を身につけた労働者たち、賃金も高く、ほとんどが読み書きでき、創造精神をもち、自分の住居に住む労働者たちであった。しかしかれらにはもはや親方になるという気は稀にしかない。かれらはとりわけパリの定着人口を形成していた。

他方、四万を数える1のグループの建設労働者は、その大多数がパリの外からやってきた流動人口であり、家具つきの貸部屋に住んでいた。たいていは二年たたぬと妻子を残してきた地方へもどらないが、かれらはできるかぎり金をためようとしていた。針仕事に携わる4のグループの労働者たちは統計に捕捉さ

れたかぎりでも八・四万人にのぼったが、やはり熟練度の低い職種が多数を占め、その一部は流動人口をなしていた。これらとは別に2のグループの大工場労働者は、繊維・紡績と金属・機械を合わせてみると、五・五万人をかぞえた。かれらは「教育を受ける余裕もないままに仕事に入り、徒弟見習期間ずらない」。そして「牢獄」とも呼ばれた工場で、雇主の課したきびしい職場規律のもとで働いていたのである（2）。もっとも、3のグループに属する労働者でも、人数の多い作業場で働くほうが、習慣、教育程度ともに大工場労働者に接近していた。

ところで、これらの労働者たちは、七月王制下のパリの労働者街に、市民社会から相対的に独立した自律的な生活圏、生活文化をきづいていた（3）。

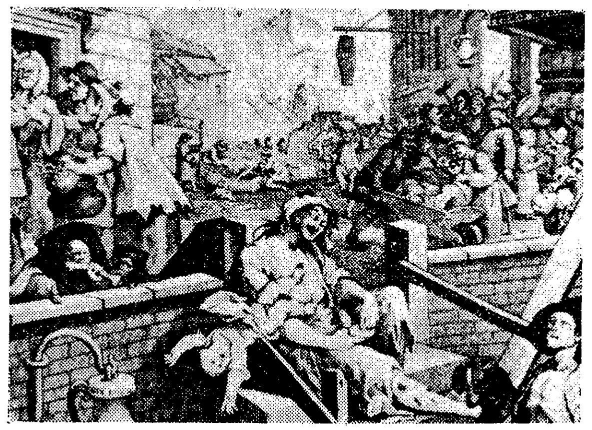
労働者たちは、居酒屋での〈出会い〉を大切にし、仕事の手始めに、あるいは昼食がわりとか仕事中くり返してとか、目と鼻の先にある居酒屋で仲間と酒をくみかわす。仲間の絆のまえには職場の規律など糞くらえ！　そのうちしばしば酔っ払って仕事にならない者が出る。仕事が終ったら終ったで、市内の外の「関の酒場」へ出かける。そこで金を惜しむ者は仲間たちへの陽気なからかいの対象となる。そんなかれらが、日曜、それにつづく月曜には、しばしば家族づれで、見世物や店のならぶ市門の外へどっとくり出す。けっきょくかれらが集まるのは「関の酒場」だ。酒場では、仲間同士の親身の相談事もあれば、新聞の朗読もあれば、シャンソンの合唱もある。月曜は「仲間の日」とも「聖月曜日」とも呼ばれて、労働者が気ままに仕事を休んでどんちゃん騒ぐのは、雇主たちにとっても市当局にとっても頭痛の種であった。

同じ職種の労働者たちは、熟練の獲得のための共通の経験、それと重なったこうした生活の「四つ辻」でのふれ合いをつうじて、かれら独自の人的な結びつきをつくり、共通の〈まなざし〉、感覚的に理解しあえてしまう言葉を培っていった。しかも、この共通の、〈まなざし〉、心性、のなかには、大革命につづいて七月革命の後にも、政治革命で語られた言葉、暴力が幻想であったこと（「政権以外に何も変らなかった。」）が刻みこまれ、七月革命後も変らぬ生活現実のなかにとり残された者たちとしての〈労働者（諸）階級〉という集団的な自己確認の伝統が生まれていたのである。

このような人的な結びつき、共通の〈まなざし〉、心性が培われていたがゆえに、居酒屋は、ごく自然に「出て行く」型のプチ・ストライキの舞台となった。例えば、雇主から侮辱されたと感じた労働者がぷいと出て行き一人、二人とあとを追って居酒屋に集まるという寸法である。そして、「関の酒場」は、より意識的で大規模な、街頭騒乱へ拡大していく性格をもった、労働者の多様な運動の結集の場となった。七月王制下では一八三三年と一八四〇年に、とくにパリを中心として、ストライキが多発した。それらのストライキは大部分、同一職種の労働者相互の、「ちょっとした接触」から、少数の労働者グループが職場に回状をまわすことによってはじまる（4）。ついで、きまって日曜か月曜に、「関の酒場」で労働者の集会が開かれ、議長や会計がきめられ、基金がもうけられたりする。さらに、そこでの確認にもとづいて、デモ隊が編成され、これが街頭から仕事場へ、また街頭へと進み、仕事場でまだ労働している者たちに仕事の放棄を訴える。このようにくり返し試みられたストライキ拡大のための街頭行動は、労働者のなかに街路や広場のイメージに裏打ちされた行動のトポグラフィーを定着させていった。そして警察が介入したのは、多かれ少なかれ実力をともなったこの街頭デモに対してであり、そこにまた運動が騒乱へと転化していく契機も孕まれていたのである。

だが、労働者のさまざまなグループのあいだの大きな相違を見落してはなるまい。熟練度が高く、賃金をえて、定着度も高い、しかもしばしばギルド的伝統を引いている職人的労働者、すなわち3のグループや1、4のグループの一部の労働者たちこそ、いうまでもなく、もっとも強い人的な結びつき、共通の〈まなざし〉、心性の形成、さらにはそれをベースにしたもっとも活発で持続的な、しかも組織性の芽をもった運動を担っていた。しかし熟練度定着度が低くなるのに応じて、1、2、4、のグループの大部分の労働者たちはそれに比べると見劣りがした。しかし、生活が不安定で、しかも人的結びつきも弱く、自分たちの身を護る組織や運動に縁の薄かったこれらの労働者たちほど、ストライキ自体暴発的で、また瞬発的な街頭騒乱にその強烈な憤満のエネルギーをぶちまける傾向が強かったといえよう（5）。

ただ、強大な王国の首都ゆえに、城壁を必要としなくなり、それをとりこわしたパリでは、職人労働者と貧民とのあいだのへだたりは、ウィーンのように深刻なものではなかった。ウィーンでは、職人労働者と貧民とが城壁をへだてて住み、したがって心性においてもぬきがたい壁をもち、三月革命のなかで敵対することになるのであった（6）。



酒場（ホガース画）

闘鶏（ホガース画）

アソシアシオン―民衆の運動・組織論

さて、七月王制下にこのように自律的な生活圏、生活文化、そして階級的自覚をもつようになった、労働者たちがはぐくんだ運動論＝組織論がアソシアシオニスムであった。

『パリ民衆の秘密』を著わしたA・コルボンは、一八四〇年以降のパリの労働者のなかには、〈労働者のアソシアシオン〉、〈労働の権利〉、それに〈コルポラシオン〉という三つの体系が存在したとする。そして、前二者は社会主義の諸学派によって民衆のなかにもたらされたものであり、「コルポラシオンを再建するという思想はパリの仕事場自体のうちに生み出されたものである」と指摘する。

コルポラシオンは大革命によって解体されたギルドである。熟練職人労働者たちのあいだには、これを文字どおり再建するというのではないが、それに相当する協同の結合を求める強い共通の心情があった。「労働を組織しようとするすべての体系のうちで、コルポラシオンを合法的なものにしようとする考えは、労働者の感情ともっとも通じ合うことのできるものである。」しかもこの思想の底には、「賃金の低下、そしてさらには労働者の没落に抵抗しようという欲求が存在する。」コルポラシオン再建の思想、心情こそ、じつは、パリの労働者たちの共通の心性のもっとも重要な部分にほかならなかった（7）。

そして七月王制下の現実には、長年の伝統をもったコンパニョナージュ（職人組合）の弊害、限界があらわになってきていた。職人組合は、仲間職人の「フランス巡歴」を中軸とした相互扶助的協同組織であったが、守護聖人を祭る宗教結社で、内部に封建的因習をかかえており、分派抗争を重ねていた。しかも組合員資格が終身でないため、ますますふえる、自前の仕事場をもてない職人労働者たちの必要に応えられなくなっていた。また、もともと職人巡歴になじまない職種に浸透していなかったばかりか、産業革命の進行とともに増加する非職人的職種とは無縁であった。この職人組合に造反した見習職人たちを中心に、宗教性を払拭した巡歴修業の「ユニオン」もつぎつぎに生まれはじめていた。そしてより熟練度の低い、あるいは巡歴を必要としない職種には、相互扶助組合の組織が急速にすすんでいた（8）。

産業革命の進展にともなって激化したイギリスにおけるラダイツ（機械破壊運動）

産業革命の進行のなかで没落、窮乏の危険にさらされた労働者たちにとって、コルポラシオン再建の心情にぴったりの、自分たちを救い出す運動論＝組織論は、切実な必要であったことが理解されよう。

この必要を満たすものこそ、〈アソシアシオン〉にほかならなかった。

サンシモン、フーリエによって唱えはじめられ、ビュシェに至って緻密に具体化されたアソシアシオン、つまり社会主義思想が生み落としたアソシアシオン、これがまさに労働者の合言葉となっていった。

一八三三年に起こった仕立工、ついで靴工印刷工のストライキで、リーダーたちは職能別の団体を総結集するアソシアシオンの結成を訴えた（9）。そして一八四〇年からC・A・コルボンによって創刊された労働者新聞『アトリエ』が、このアソシアシオンを労働者活動家たちのなかに広く浸透させていったのである。

アソシアシオンは、協会とか組合とかいう言葉であるが、『アトリエ』紙や労働者活動家たちが使うとき、はっきり具体的な組織が思い浮かべられていた（10）。それは通常今日われわれのいう生産協同組合を指した。それは個々の職種についても、あるいはまたそれら個々の職種による職種別組織についても、一地域の多数の職種の労働者を結合した地域組織についても、あるいはまたそれらをすべて結合した全国組織についても用いられた。ただ、それは、狭く生産の領域に限定されていたわけではなく、しばしば相互扶助や交換と消費などの分野をも協同的に組織すると考えられていた。

これらのアソシアシオンは、労資の階級対立の経験が蓄積されることをとおして、もはやサンシモン、フーリエが当初考えたように労資協力的に構想されはしなかった。協同組合にとって基金の確保はひきつづき切実な問題であったにもかかわらず、資本家からの資本供与はもはや期待されなかった。それどころか拒否された。労働者による基金の拠出とその不可分、払いもどしえない元本としての性格が強調された。ただ分配においては、労働に応じた分配を基本としながら、拠出した基金に応じた分配を認めるものも混じっていた。そしてこのアソシアシオンとアソシアシオンのあいだには競争が積極的な意味をもつものとして認められた。

しかし、これらのアソシアシオンは、じゅうらいの職人組合の変形発展、あるいは相互扶助組合からの成長として、熟練手仕事の領域においてなら容易に構想されえた。そうとしても、新たに登場しつつあった機械制大工場のごとく、もはや労働者が拠出できないほどの大きな金額の生産設備を資本家が供給しなければかりか、労働者が限定された熟練しか要せず、したがって仕事場の秩序さえ自分たちの思うようにできず、営業の権力の介入を招くようになっていた領域までも包摂しがたいこと（11）がしだいに明らかとなった。そこで、もう一つ、労働者が全権掌握する組織ではなく、資本家を生産設備拠出者かつ工場生産の組織者として認め、この資本家と労働者が国家の主宰のもとで協議する組織をつくる構想が生まれてきた。ビュシェの〈労働の

組織〉がそれである。ビュシェの弟子やアトリエ派の人々はこの考えを継承しはしなかったが、この〈労働の組織〉を、大企業組織そのものとして構想し、ふたたびアソシアシオンの一環へと組みこんで、大きな影響力をえたのが、ルイ・ブランであった。

競争を根本の悪として告発するルイ・ブランは、政府を「生産に関する最高の調整者」とみた。この政府が「機械工業、絹工業、綿工業、印刷業といったすべての主要産業」(大工業部門)において「社会的作業場」を創設する。作業場内の階層序列は初年度は政府の任命によって、次年度以降は労働者の選挙によって選ばれる。賃金の平等が追求されるべきだが、さしあたっては「職務の階層にもとづいて段階づけられる。」利益は三分され、一部は構成員に平等に分配され、つぎのものは老人、病人の扶助と恐慌のさいの備えにあてられ、最後の部分は新たに加入しようとする者への労働用具の供給にあてられる。この「社会的作業場」は、労働者の生産意欲ゆえの高い労働生産性をもって私企業との競争にうちかち、その産業部門全体、やがてはすべての産業部門を包括し、生産のみならず消費と共同生活の中心となるであろう。「暴力も動乱もなしに」「われわれは競争を敗北させ、アソシアシオンを獲得するであろう(12)。」

こうして、アソシアシオンは、文字通り当時の労働者の合言葉であった。だれもがアソシアシオンを口にした。

ただ、このアソシアシオンは、具体的な組織が考えられるようになっていたとはいえ、サンシモン以来夢のある、ふくらみをもった観念であった。そして具体的に生産協同組合が考えられるとしても、楽観的な労働者たちにとってアソシアシオンはすべての社会問題の解決であった。一方では、労働者たちは、個々のアソシアシオンが外部に対して商品交換をおこない、相互に競争関係に立つことを重大に考えなかった。友愛・協同の関係が容易に他のアソシアシオンとのあいだに築かれうると思い描かれた。そういうかれらにとって、国家とは、せいぜい信用の組織化に役立つものとして、遠くにぼんやりと感じられる存在にすぎなかっただろう。他方で、競争を多少とも重大に考えたかぎりでは、労働者たちは、国家をアソシアシオン自体の組織化を推進する装置として不可欠のものとみた。しかし、そのかれらにとって、国家がアソシアシオンの組織に対してもつ意味は重大に考えられていなかったわけである。ともあれ、こうしてアソシアシオンは、産業革命の進行とともに没落と窮乏の危険をひしひしと感じつつあった労働者たちが共通に夢みたユートピアであり、「メシア的公式」だったのである。

このようにふくらみと幅のある形でアソシアシオンを唱えた労働者たちの政治的主張は社会的共和制に要約できる(13)。それはプチ・ブル的な急進民主主義の主張に対して、「人民主権」を唱える点で共通の立場にたったが社会変革を強調する独自性をそなえていたわけである。ただ、どういう職業についているか、そしてどういう型のアソシアシオンを唱え、国家にどういう役割を割りふるかによって、労働者たちのあいだに、おのずと政治への関心と関わりの差が生じていたであろうことは疑えない。ルイ・ブランにしたがって「労働の組織」を実現しようとすれば、いや応なしに政治変革にまず眼がむかうこととなるだろうからである。

ともあれ、アソシアシオンのユートピアがどれほど強烈な魅力をそなえており、当時の労働者たちの傾倒がどれほど真剣だったかは現代のわれわれの理解の範囲をこえ出るばかりである。だからこそ、やがて二月革命が勃発すると、臨時政府は、周知のごとく、労働者代表から「労働の組織」「保証された労働権」を要求され、「労働によって生きる保証」を約束し、労働者が自己の労働の利益を享受するために「相互に結合しなければならないこと」を承認することになるのであった。また、「労働の組織に関する省」の設置を要求され、ルイ・ブランを議長とし、続々あらわれた地域のコルポラシオンを代表の選出母体とするリュクサンブール委員会を設置し、「国民作業場」や労働者アソシアシオン助成法をつくることになるのであった。

共産主義者たちとの論争

アソシアシオンを運動論=組織論とした狭義の労働者たちをはさんで、狭義の社会主義者たちはコミュノーテ(共産制)に固執する共産主義者たちとはげしく論争することになった。アソシアシオン対コミュノーテというのは、狭義の社会主義と共産主義者を分かつもっとも重要な対立点にほかならなかった。一八四〇年代に労働者たちが出していた四つの月刊紙中唯一コミュノーテ支持の立場をとったネオ・バブーフ派の『フラテルニテ』は、つぎのようなアソシアシオン批判を展開した(14)。

最後のバリケード

アソシアシオンとコミュノーテは、この世の始まりと同じほど古く、どちらも社会性の表現である。しかし、「アソシアシオンは、過去の利己的で不完全な社会性を表現している。アソシアシオンは、それがその均衡を追求する諸利害の接近をめざす。それは利己主義を絶滅するのでなくて、一つにまとめるのである。それに対してコミュノーテは社会性のいっそう精密で、もっと完全な表現であり、協同組合が無視する一般法則から着想を得ており、すべての人間に同一の生を生きさせ、かくして分割や競合や闘争や分裂のあらゆる原因を消滅させることによって、すべての人間の思想と行動を一つの思想、一つの共同の目的のなかに統一し融合させる。」じっさい上の

手段の問題を考えても、必要な資本を労働者が拠出することは期待できず、したがってアソシアシオンを支配するのは資本となる。「いくつかのちっぽけな試みなどは、これほどさし迫った必要に直面して何をなしうるであろうか。」仮に設立可能と認めて「その道徳的運動」を検討しても、アソシアシオンは利己心ゆえに混乱と分裂に陥るのは避けられない。アソシアシオンの仮説においては、まずアソシアシオンが好まれ、ついで国家が好まれる。」しかし、「社会体のすべての部分が調和し、社会体が生命と活動力をもつためには、権力を強力に組織するべきである。」そして最後に、「われわれは、協同組合を一時的手段としても認めることはできない。……アソシアシオンは、確実に、利己主義をより広くより大きな基礎のうえに据えるだろう。」「われわれの考えでは、公共的なものの再生は、社会的権力によってしか遂行されえない。その改革的な権威のもとで、社会が望むすべてのもの、社会に必要なすべてのものは、ただちに実現可能になる。」

私有財産と利己主義の原理的否認、個の契機を強調することなき一つの全体への統一的融合、そして運動論の拒否といっさいを解決するものとしての政治革命への没入。見事なまでの図式である。

このようなバブーフの潮流に対しては、当然にも、「完全な物質的平等のなかに人間を閉じこめてしまおうとするもの」、「平等のために自由を取り上げてしまうもので、人民を兵舎に収容するようなもの」などの批判(15)がおこなわれた。サンシモン派やフーリエ派の、そしてまたもっともアトリエ派の労働者たちは、政治改革が社会改革に先行すべきかどうかについては、どちらかというとプラグマティックに、肯定的に考えていた(16)。

共産主義者でもアソシアシオンを説いたカベー派のアソシアシオンは、言葉はともかく内容はコミュノーテと同一であったから、これも非現実性、家父長的権威的性格のゆえに批判を受けた。また、同一産業での単一アソシアシオンを唱えたルイ・ブランも、この点では同じような批判を免れなかった(17)。

(1) 『パリの産業調査―一八四七～四八年度』(河野健二編『資料フランス初期社会主義』所収)
(2) 喜安朗『パリの聖月曜日』二一六―七ページ。
(3) 同右、二〇六―六一ページより、以下を要約
(4) ただし、「このことは、ストライキが事前に組織によって準備されたものではなかったことを示す」と説明する喜安氏(『パリの聖月曜日』二三六ページ)に対し谷川氏は、「もっぱら自然発生性にのみ依存する性質のものではなかった」、「いずれにも組合や相互扶助組合、さらには共和派結社など何らかの恒常的組織が介在していた」と主張している。(『フランス社会運動史』三八ページ)
(5) 谷川稔、前掲書、三八ページ。
(6) ウィーン三月革命の事例については、良知力『青きドナウの乱痴気』をみよ。ただし、良知氏はこの敵対の史実から「貧民こそ真のプロレタリアートである」との結論を引き出しているが、これには同意できない。
(7) 喜安朗『パリの聖月曜日』二四〇～二ページ。
(8) 谷川稔 前掲書 二五～四一ページ
(9) グリニョン「一仕立屋の考察」Z・エフラン「あらゆる職能組織の労働者による協同組織について」、J・ルルー「都市賃金労働者の境遇を改善するための方策」(いずれも前掲『資料フランス初期社会主義』所収)。
(10) 以下、アソシアシオンのさまざまな構想とその差異については、同右所収の諸資料および谷川稔前掲書、六八～七三ページによる。
(11) 最初に〈労働の組織〉を説いたビュシェがアソシアシオンが大工場労働者の大部分を包摂できない理由としてあげたのは、まさにこの二点であった。(「都市賃金労働者の境遇を改善するための方策」河野編 前掲書所収 九四ページ。
(12) ルイ・ブラン『労働の組織』八六～九ページ(阪上孝『フランス社会主義』一二七～八ページ)。
(13) 「労働権と社会的共和制」『アトリエ』一八四四年三月号(河野健二前掲書所収)
(14) 「アソシアシオンとコミュノーテについて」『フラテルニテ』一八四五年一月一日号(同右所収)
(15) フィリップ=J=B・ビュシェ『フランス革命議会史』序文(同右所収)
(16) 「労働権と社会共和制」『アトリエ』一八四四年三月号(同右所収)
(17) 谷川稔前掲書、七一ページ。

V、マルクスの選択

このパリへマルクスはやってきた。プロイセンを追われるように出た二五才の哲学青年マルクスは、一八四三年一〇月から一八四五年二月までの一年四ヵ月間、パリに滞在した。よく知られているように、その前まで『ライン新聞』の主筆として活動したマルクスは、「いわゆる物質的な利害関係に口をださないわけにいかなくなって、はじめて困惑を感じた。」それに、「フランスの社会主義や共産主義についての淡い哲学色をおびた反響が『ライン新聞』のなかでもきかれるようにな」り、「この未熟な思想にたいして反対を表明したが、同時にまた……わたくしのこれまでの研究では、フランスのこれらの思想の内容そのものについてなんらの判断をくだす力のないことを率直に認めた。」そして、「公の舞台から書斎にしりぞいた」のだった(1)。パリ滞在は、このような状態にあったマルクスにとって、まさに疾風怒濤の時代を経験することとなった。アソシアシオニスムと社会的共和制を主張する労働運動の登場を目の当りにし、それをとりまく社会主義諸思想に接して刺激を受けた。これらの刺激はかれの内部に巨大な星雲状態をつくりだし、マルクスは、『経済学・哲学手稿』を皮切りに、やがてブリュッセル時代に『ドイツ・イデオロギー』から『共産党宣言』へと、唯物史観にもとづく独自の共産主義思想を結実させていくことになった。

マルクスの思想形成にパリの労働運動と社会主義諸思想がどう役立ったか——それはかれのパリ時代のノートの公刊を待たなければ十分つまびらかにはならない。いや仮にノートが公刊されても、運動とその諸思想についての情報が、その性質上、哲学や経済学についての情報とは異なって、まとまった著作やパンフレットをとおしてばかりでなく、直接口伝えに、あるいはせいぜい新聞やビラをつうじて入手されたであろうことを考えるなら直接の立証はきわめて難しいだろう。しかしわれわれは、かれの確立した思想のパターンをこれまでにみてきた同時代のパリの諸思想のパターンと突き合わせてみることで、さらにまたそれらの諸思想についてマルクス自身が残したコメントを吟味することによって、興味深いいくつかの点を明らかにしうるのではあるまいか。

マルクスの共産主義は、一口にいうなら、狭義の社会主義から重要な諸契機を採りいれさらに独自の発展を試みた共産主義、しかしやはり共産主義であった。

科学的歴史観と終末論の展開

なによりもまず、マルクスの唯物史観は、人類の悲惨から解放への展開を語った壮大な歴史観であり、しかもそのようなものとして社会の科学たらんとした点において、サンシモン、フーリエを先行者にもっていた。それらは先行する共産主義思想の系列にはまったく欠けていたものである。

一九世紀の最初の二〇年は、フランス・ロマン主義の風潮のなかで社会主義の父祖たちがその歴史科学的基礎を得ようとした時代であった。かれらにとっては、大革命への反省から、いっさいの伝統的なもの、非合理的なものを排除し、人間が考えだした合理的な理想を実現できると信じた一八世紀の啓蒙主義思想、その合理主義の限界こそが自覚されなければならなかった。そして神学から自立した自然科学の勃興は、社会についても科学の成立を予想させるものであった。こうして、歴史の法則をつかんだ壮大な歴史観が生まれしかもそれらは〈哲学〉を退け、〈科学〉を称したのである。

マルクスはこのような社会主義の父祖たちの志向を引き継いだ。細部の内容のあれこれではなく、まずこの点に注目すべきだろう。とりわけ、社会の生成・発展・没落、搾取と敵対、階級闘争としての歴史、進歩と歴史的必然そして歴史法則への自覚的服従といったサンシモンの歴史観、「実証的な」「人間の科学」のフレームワークは、それなしには唯物史観の構想も容易ではなかったほどの重味をもっていたのではないか。

マルクスとサンシモンの思想的出会いは、まず、少年時代、義父ルードヴィヒ・フォン・ヴェストファーレンをつうじてであった。サンシモン主義は一八三〇年代にドイツの知識人を広汎にとらえ、ヴェストファーレンもそのうちの一人だった（2）。ついで、マルクスは、ベルリン大学のガンス教授の講義から（3）さらに『ライン新聞』前後、モーゼス・ヘスからサンシモン主義の知識を吸収した。

大学生時代のマルクス

そしてパリ滞在中は、サンシモン主義者のハインリヒ・ハイネと親交を結び、かれから『サンシモン学説解義』などについて知らされたらしい（4）。マルクスは比較的早くからサンシモンの思想の特徴的フレームワークに接していたといえよう。ただ、『経済学・哲学手稿』に至るまで、マルクスの書いたもののなかにサンシモンの名は登場してこないし、またずっと後になってからも、サンシモンの著書を丹念に読んではいないことを思わせるようなサンシモン評価の間違いを犯している（5）。

じつは、ドイツにおいても、サンシモン、フーリエとちょうど同じ時期に、周知のごとく、ヘーゲルが啓蒙主義的な合理主義への反省を深め、やはり人間の意志で動かしようもない歴史の法則、歴史的必然の思想へ到達していた。歴史観の探究は、近代批判にむかうこの時代のヨーロッパ知識人のある部分をつき動かした共通の情熱だったのである。ただヘーゲルは、この法則を観念的に、絶対者としての神—精神であり理性である神の自己実現の過程として理解した。そして絶対者の本質は自由である。歴史とは、したがって、自由の進展、実現の過程にほかならなかった。

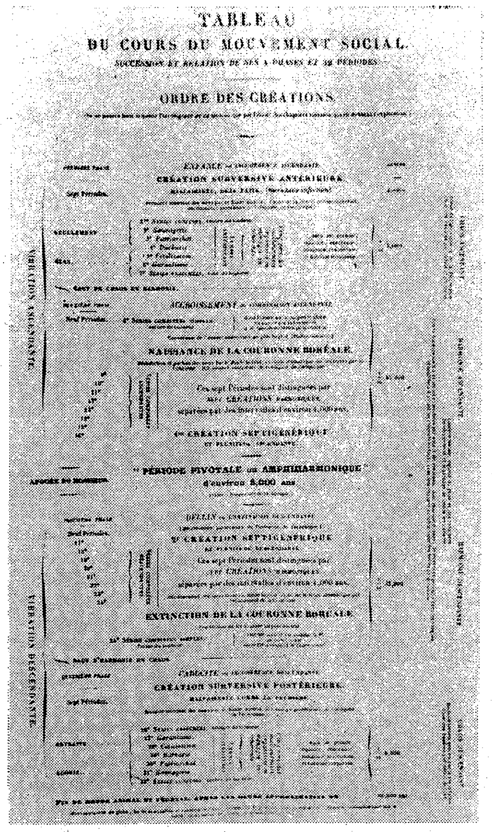
このようにいわば時代の共通の志向をもったヘーゲル哲学の体系を学んでいた青年ヘーゲル派の人々には、近代資本主義社会についての豊かな洞察を盛りこんだサンシモン、フーリエの歴史観に接した時、ヘーゲルのフォイエルバッハ的顛倒を試み、独自の、やはり壮大な歴史観を構想する相当の準備があったというべきであろう。

ところでマルクスは、プルードンの先例にしたがい、自分の構想した歴史観こそ真に〈科学的〉の名に値すると自負した。「共産主義者の理論的諸命題は、けっして、あれこれの世界改良家が発明または発見した理念や原理をもとにしてはいない。それは、現におこなわれている階級闘争の、われわれの目前におこっている歴史的運動の、現実的諸関係を一般的に表現したものにすぎない」（6）そこからエンゲルスとともにサンシモン、フーリエの思想を空想的という意味においてユートピアンと呼んだ。その意味では、マルクスもまた反ユートピストであった。たしかにサンシモン、フーリエの歴史観に空想的要素が大きいことは事実である。だが、〈空想から科学へ〉の文脈で、これまで一方ではサンシモン、フーリエの先駆的な社会科学志向と、たんなる志向だけでなく、新しい資本主義社会の仕組みについてのかれらの深い洞察が正当に評価されず、他方では、科学的と称したマルクスの唯物史観そのもののまぬかれることのできない、歴史観としての限界が不問に付されてきたことは否めないだろう。今日われわれは

とりわけその限界を解明する必要に迫られているといえよう。

「サンシモン、フーリエ、オーエンなどの体系は、……プロレタリアートとブルジョアジーのあいだの闘争の初期にあらわれる。なるほどこれらの体系の考案者たちは階級対立をも、現存社会そのものの内部における解体の作用をも、自分の目でみていた。しかし、……階級対立の発展は産業の発展と歩調をあわせてすすむものであるから、彼らの時代には、プロレタリアートの解放のための物質的諸条件もやはりそなわっていなかった。そこで、彼らは、こういう条件をつくりだすために、ある社会科学社会諸法則を探し求める。

社会的活動は、彼らの個人的工夫の活動に席を譲らなくてはならなかった。解放の歴史的諸条件は、その空想的な諸条件に席を譲らなければならなかった。漸進的におこなわれるプロレタリアートの階級への組織化は、わざわざ案出された社会組織に席を譲らなければならなかった。彼らにとっては、将来の世界史は、彼らの社会計画を宣伝し実行することに帰着するのであった。」（7）。



フーリエによる「社会的運動の推移表」（『四運動の理論』1846年刊第3版より，翻訳は巻末折込）

なるほど、サンシモン、フーリエが社会科学を求めたことまでは指摘されている。しかし、それまでがむしろかれらの思想の空想性を浮かび上がらせるために用いられてしまっている。同時代のサンシモン派、フーリエ派との思想闘争にきっぱりけじめをつけたいという意図から出たにせよ、サンシモン、フーリエの深い洞察を知れば、これはいかにもフエアでない、というほかあるまい。ここにはマルクスの自己絶対化の傾向が萌していた。じっさいまた、マルクスの理論の雰囲気に権威主義的なものを嗅ぎとったのが、マルクスがパリ滞在中親しくつきあったプルードンであった。それが両者をはげしく分かつことにもつながったわけである（8）。そして、あちらは空想、自分は科学と断定したマルクスの方の認識に、じつはのちにみるような問題が潜んでいたのである。

唯物史観は、サンシモン、フーリエの歴史観に比べれば、はるかに多くのたしかなものをもっていた。とはいえ、それもまた、かれらの歴史観と同じように、いわば本質直観的な普遍化によって成り立っていたといえる。唯物史観は、のちに、サンシモン、フーリエの歴史観とは決定的に異なって、その近代資本主義社会の認識の部分について、マルクス自身の経済学研究によって科学的根拠づけを得ていくことになる。だが、その経済学研究自体が、ここで立入るわけにはいかないが、じつは、疑いもなく唯物史観から貴重な批判的視座と洞察の示唆とを得ながら、同時にまた、唯物史観の強烈な終末論的公式の妨害的な影響から自由ではありえなかったのである。

ともあれ、マルクスの唯物史観は、サンシモン、フーリエの歴史観と同様、目的論的かつ決定論的なものとなり、そればかりかいちじるしく終末論的なものとなった。

ブルジョアジーにも歴史的に革命的な役割を認めたうえでの「自由の王国」へむかっての進歩。しかも、自分の呼び出した生産諸力にもはや照応しなくなってしまったブルジョア的な生産諸関係、所有諸関係。「ブルジョアジーの没落とプロレタリアートの勝利とは、ともに避けられない」。そして、ますますひどくなる隷属、搾取、ますます不快になる労働などの叙述の行間に予感されている最後の決着の切迫感（9）。

強烈な終末論は、原始キリスト教が復活、再臨に重要な意味を与えて以来、キリスト教のなかに伝わっているものであり、それは共同体社会の解体の危機に、カトリック教会に楯つく熱狂的な千年王国運動としてくり返し噴きだしてきた。それはヨーロッパの人びとにとってはよく知られた、危機における思考パターンの一つだったといえる。進行する産業革命は、都市でも農村でも共同体的諸関係をなだれをうって解体してすすんだ。西ヨーロッパでその影響が頂点に達したとみられる一八三〇、四〇年代は、社会主義諸思想に多かれ少なかれ千年王国運動に似た切迫の予感と情熱とを与えたわけである。そしてマルクスはとりわけ強くそれを受けとった「時代の子」であった。

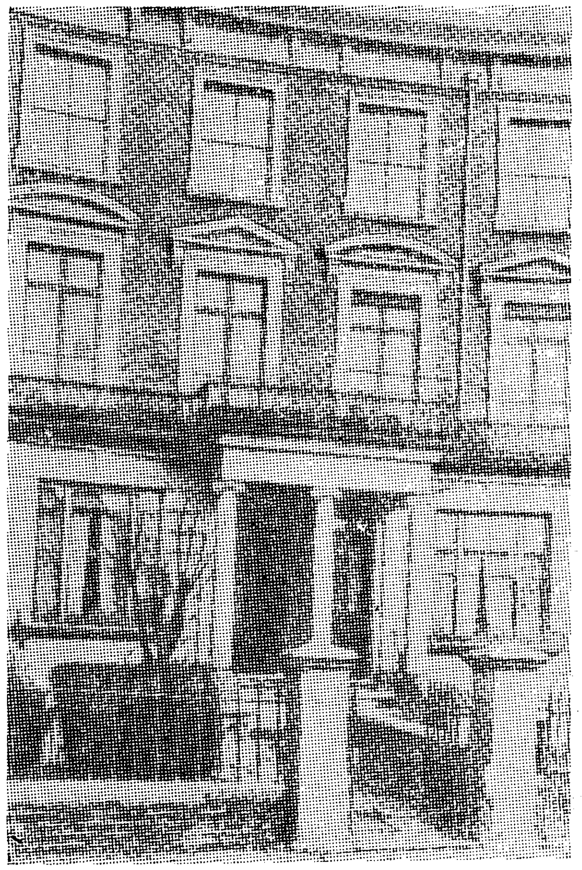
共同体原理主義のアソシアシオン

だが、その歴史観の形成にあたって貪欲に社会主義の父祖たちから吸収したものの、マルクスが自分の歴史観のなかにうちだした革命観は、紛れもなく共産主義者のものであった。わけてもバブーフ、ブランキの線を継承していた。獄につながれ、ついで恩赦後地方の施療院にあったブランキとは直接会うこともなかったにもかかわらずである。

まず、マルクスが『共産党宣言』で資本主義社会の没落の彼方に思い描いたユートピアは、アソシアシオンであった。

「階級と階級対立のうえにたつ旧ブルジョア社会に代わって、各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件であるような一つ

マルクスの住んでいた家（1876〜83）



のアソツィアツィオーン（共同社会）が現われる（10）。

マルクスのアソシアシオンは、機械制大工業をもって構想されていたとはいえ、実質的にコミュノーテと変わりない、共同体原理主義のアソシアシオンであった。

「協同した諸個人の手に全生産が集中され」る。この「協同した諸個人」は、一八八八年の英語版では、エンゲルスによって「全国民からなる結社（アソシエイション）」とされており（11）、単一の全体が考えられていたことは間違いない。「共産主義者は、自分の理論を、私的所有の廃止という一語にまとめることができる」（12）。そして資本は「共同の所有、つまり社会の全成員に属する所有」に移される、というのである。

『共産党宣言』の下書きとなったエンゲルスの『共産主義の原理』は、新しい社会秩序について、国民と国家とをしきりに混同しながらもっと立ち入って規定している。

「なによりもまず、工業および一般にあらゆる生産部門の経営をたがいに競争する個人の手からとりあげ、そのかわりに、すべてこれらの生産部門を、全社会によってすなわち共同の計算で、共同の計画にしたがって、また社会の全員を参加させて、経営されるようにしなければならないだろう。こうしてそれは、競争を廃止し、そのかわりに、アソツィアツィオン（協同社会）をもたらすであろう。さて、個人による産業経営はその必然の結果として私的所有をともなうものであり、また競争は個々の私的所有者が産業を経営するやり方にほかならないから、私的所有は産業の個別的な経営や競争から切りはなすことができない。だから私的所有もまた廃止しなければならない。」そして、「すべての資本、すべての生産と交易が国民の手に集められるならば、私的所有は自然になくなり、貨幣は無用になり、生産がふえ、また人間が変化するので旧社会の最後の交通形態がなくなるであろう。」（13）

人間関係には共同の関係以外あってはならない。貨幣と商品交換の関係はきびしく拒絶される。これが共同体原理主義である。しかしマルクスは、これまでの共産主義者のように自然に弧立的な村落共同体が思い浮かぶ農業社会的な共産主義ユートピアを語るわけにいかない。工場制手工業でさえなく、世界市場を生存基盤として発展した機械制大工業を中心にすえようというのだから。大工場の原料と製品は、どうみても狭い範囲内の自給自足には適さない。そこでマルクスは、全社会を、あるいは少なくとも一国民経済全体を、単一の共同体にまとめてしまう構想をもって共同体原理主義を貫いたのであった。それがマルクスのアソシアシオンである。

貨幣を弾劾したのはなにもマルクスや共産主義者たちだけではない。社会主義者たちもプルードンでさえも、「貨幣の王権」の廃止を主張している。しかし、かれらは、貨幣の廃止を主張した場合にも、むしろ貨幣の奴隷となることから逃れようとしたのであって、等価物の交換の原理までも一掃してしまおうとしたのではけっしてなかった。プルードンの「交換的正義」とは、いってみれば〈貨幣なき商品交換〉の構想にほかならなかった。マルクスは、それが貨幣の本性の無知にもとづいていることをはげしく批判したのであるが、他方、等価物の交換を排してしまって、果してどこまでものっぺらぼうに協同的な社会をどう構想できるのか――すぐさまこの問いがかれにはねかえったはずなのである。

十数億の人類を包む単一の共同体！　だがそこには村落共産制のユートピアには考えられなかった大きな無理を生じたのではないだろうか。

むろんそんな大きな共同体が人類の歴史上かつて存在したためしはない。商品交換を閉め出した共同体で現実に存在したのは、せいぜい数百人までの規模の、おたがいに日常顔のみえる人たち、いやおたがい日常ふれ合う人たちの集団としてであった。古代以来の世界帝国は、たしかに巨大な規模の、一種の共同体にはちがいない。しかしそれは、共同体以外の組織原理、すなわち支配―服従と商品交換の組織原理と共存し、補完を受けて、あるいはむしろそれらを主として、はじめて成り立っていたことを忘れてはなるまい（14）。コミュノーテ（村落共産制）のユートピアは孤立したコロニーをつくることで、〈外〉を忘れるなら、比較的容易に、ただしミクロ・コスモスとして実現が可能であった。じっさいまた当時多数の共産主義コロニーが新大陸に建設された。しかし、大工業を中心にすえたアソシアシオンとなると、そうはいかなかった。これこそもっとも雄大なユートピア中のユートピアといえたが、どうにもその構想の具体化のしようがなかった。マルクスがのちのちまで具体的に語ろうとしなかった事実は通常マルクスの、必要な禁欲の美徳として語られるが、じつは具体的に語れなかったというのが真実だろう。それは、いつまでももやもやとして手の届かない彼岸の究極目標にとどまるほかなかった。そしてレーニンのようにそれを具体化しようとすると、今日のソ連

の実例が雄弁に物語っているように、連邦レベルでは協同の原理はずい分稀薄化して実体を失ったタテマエと化し、支配―服従と商品交換の組織原理がおおいに幅を利かすということになってしまうのを避けられない。ソ連においてはこの三つの組織原理が、協同の原理を基軸とし、それをいっそうはぐくむように意識的に組み合わせられているかどうかにも深刻な疑問が投げかけられなければならない。しかし、いまはそれを措くとして、世界的、あるいはさしあたり国民的な規模でのアソシアシオンを構想しようとするなら、それは好むと好まざるとにかかわらず、ビュシェ、アトリエ派、そしてのちにプルードンがうちだしたのと類似のもの、すなわち個々人が自由に参加する、協同の原理をもった無数の多元的なアソシアシオンをベースとしながらも国家原理や商品交換原理を組み合わせて総合するものしかなかったのではないだろうか。

資本の原理主義、すなわち私有財産、商品交換、そして私的利益の追求（エゴイズム）のリベラリズムに対して、もう一つの原理主義、労働を軸とする共同体原理主義を対置するのではなく、むしろ資本の原理主義を相対化し、その限界を明らかにするような構想が求められていた。それは思想の系列からすれば、フーリエ流の、あらゆる情念を忌避するのではなく解放し、それにもとづいて友愛の統一、調和を実現するという考えを具体化するものとなったであろう。またプルードンの、労働者個人に徹底的に依拠しようとする志向へもつながることになったであろう。

なお、共産主義者たちが平等派を称し、伝統的に共産制とともに〈平等〉を強く主張して個性の滅却に至るような傾向をもったのに対しては、マルクスは批判的であった。バブーフの共産主義を「全般的な禁欲と粗雑な平均主義」を説くものとし、「その内容からすれば必然的に反動的である」とまで否定的に評価している（15）。そしてヘーゲル譲りの、同時にまたサンシモンにも通じる〈自由〉を究極の目標の契機として強調した。ここにはマルクスの共産主義が伝統的な平等派としての共産主義から一歩出たものであることが明瞭に示されている。しかし、ヘーゲル的自由とは、必然性の洞察とそれへの自発的服従ないし推進にほかならなかったのであり、そのかぎりではいまだ個の自立の形式が保証されていたとはいい難かった。すべてを包んでしまう絶対者としての、単一のアソシアシオンに対して、出入りの自由をもたないとしたらいつでもつねに必然性を洞察する超人以外の人々は、マルクスの意図に反して、日常的に「一般意志」の支配のもとにおかれてしまうのではあるまいか。われわれは今日、共同体原理主義のアソシアシオンに潜む全体主義への傾斜に対して、十分な根拠をもってこの疑問をぶつけることができるであろう。

政治革命をつうじての社会革命

さて、マルクスが共同体原理主義のこのアソシアシオンを実現する方法として構想したのも、政治革命をつうじての社会革命、それもカベのように「法律」によるのではなく、暴力による政治革命をつうじての社会革命であった。

「現存社会の内部における多かれ少なかれ隠された内乱……がついに公然たる革命となって爆発し、プロレタリアートがブルジョアジーを暴力的に打倒して自分の支配をうちたてる……。」

「労働者革命の第一歩は、プロレタリアートを支配階級の地位に高めること、民主主義をたたかいとることである。／プロレタリアートは、その政治的支配を利用してブルジョアジーからつぎつぎにいっさいの資本を奪いとり、いっさいの生産用具を国家の手に、すなわち支配階級として組織されたプロレタリアートの手に集中し、生産諸力の量をできるだけ急速に増大させるであろう。／もちろんこれは、最初は、所有権とブルジョア的生産諸関係とにたいする専制的な侵害によらなければ、したがって経済的には不十分で永続きしないと思われる方策によらなければ、不可能であるが、しかし、これらの方策は運動の進行につれてそれ自身のわくをこえてすすむものであって、生産様式全体を変革するための手段として、避けることのできないものである。」（16）

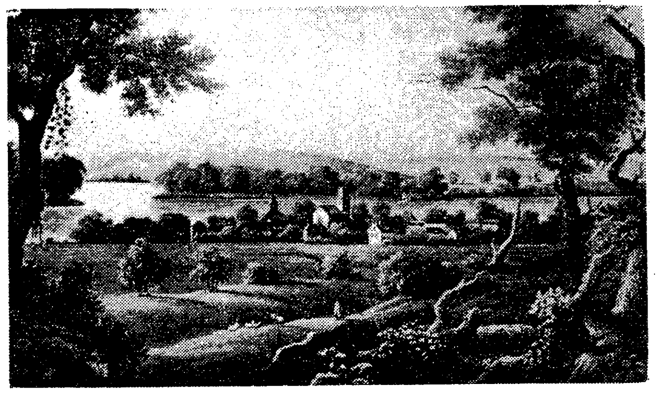
まず、暴力的な政治革命、それから革命独裁を利用した社会革命である。バブーフ、ブランキと同じである。

もっとも、この政治革命は、ただちに秘密結社―陰謀―武装蜂起として構想されていたわけではない。「プロレタリア運動は、大多数者の利益のための大多数の自主的な運動である。」（17）エンゲルスはもっと突っこんで言う。

「共産主義者は陰謀は無益なばかりか、むしろ有害でさえあることを知りすぎるほど知っている。」「革命というものは故意に、またほしいままに起こされることはなく、それはいかなるところ、いかなる時代にも、個々の党派とか階級全体の意志や指導にまったく左右されない情勢の必然的な結果として起こる。」力づくで押えつけられているがゆえに「プロレタリアートが革命にかりたてられるとすれば、そのときにはわれわれ共産主義者は……行動をもってプロレタリアの任務を擁護するであろう。」（18）陰謀は退けられ、圧倒的な民衆運動、その爆発への参加が対置されている。

しかし、バブーフはもちろん、ブランキも弾圧のよりきびしい政治状況下で、蜂起を、しかも民衆蜂起を考えていたことがまず想い起こされる。陰謀は、少数者の蜂起を首都を包む民衆蜂起へ転化させる技術なのであった。他方マルクスの側には、個々の労働運動をつうじての社会変革を評価する視点が欠落していた。「ときどきは労働者は勝利するが、それは一時の勝利にすぎない。彼らの闘争のほんとうの成果は、その直接の成功にはなく、労働者の団結がますますひろがっていくことにある」（19）。これはよく吟味すれば、致命的な文言である。これでは運動論の成り立ちようがない。「直接の成功」を通じて「奴等と俺たち」のあいだの、そしてまた「俺たち」の内部の人間関係の変革が蓄積される。後者だけを、しかも「直接の成功」と離れて強調するようでは、義人同盟から引き継いだ厳格な秘密結社（20）、共産主義者同盟を起点とするマルクスの革命論は、地についた社会運動論を欠いたまま、暴力的政治革命を当面の焦点と

産業革命期の紡績工場（マンチェスター）



オウエンがコミュニティを設けたニュー・ハアモニー

したかぎり、マルクス本人の思惑をこえて、秘密結社―陰謀―武装蜂起への傾斜をもっていたといわねばなるまい。「あらゆる階級闘争は政治闘争である」(21)という文言の意味はこうした文脈ではじめて十分に理解されるのであろう。

この運動論の欠落にまさに符号して、マルクスは、イギリス労働者の十時間法運動は肯定的に採りあげても、フランス労働者の運動論＝組織論として登場してきていたアソシアオニスムには目を止めもしない。とくに名指しもしないでマルクスはそれを「小ブルジョア社会主義」として一括する。そしてつぎのように宣言する。「この社会主義は、古い生産手段と交通手段を復活し、こうしてまた古い所有諸関係と古い社会を復活しようとするものであるか、でなければ、近代的な生産手段と交通手段を、それらによって爆破された、また爆破されざるをえなかった古い所有諸関係のわくのなかに、もう一度むりやり閉じこめようとするものであるか、そのどちらかである。どちらの場合にも、それは反動的であり、同時にユートピア的である。工業では同職組合制度、農村では家父長制経営、これがこの社会主義の最後のことばである」(22)。なんと歪んだ画像がマルクスの脳裡に描かれていたことか！

そしてまた、批判的啓蒙的意義を認めたサンシモン、フーリエ、オーエンの「批判的＝ユートピア的な社会主義および共産主義」の弟子たちに対しても、マルクスは容赦ない批判を浴びせかける。その批判のポイントは、「かれらが階級闘争をもう一度にぶらせ、対立を調停することに一貫してつとめる」こと、および「労働者のあらゆる政治活動（とりわけ革命的なもの）に激しく反対すること」の二点である(23)。第一の批判は当ってはいた。しかし、そのようなあいまいさの払拭にむかったアソシアシオニスムを退けてしまったマルクスに一体どのような社会運動がありえたのか。第二の批判には具体例がついて、チャーチストやレフォルム派への反対が取り上げられている。しかし、チャーチストはともかく、レフォルム派は労働者の運動を議会政治へ統合しようとする急進民主主義のグループにほかならなかった。マルクスが思い描くような労働者のプロ政治派は、ブランキ派カベ派を別とすれば、フランスの現実には存在していなかったのである。

パリに出てくるまえ、マルクスは、ローレンツ・フォン・シュタインの『現代フランスの社会主義と共産主義』（一八四二年）を読みそれを鵜呑みにして、「共産主義は社会主義の粗野な一形態である」という意見を書きとめていた(24)。そのマルクスがパリ時代をすごしてなぜ社会主義者とならずに共産主義者となっていったのか。

それには、マルクスのプロイセンにおける原体験が大きく影響していたと思われる。

マルクスが青少年時代を送った一八二〇、三〇年代のドイツは、フランス大革命の影響を強烈に受けながら、いまだ近代的市民社会、市民国家の確立に至っておらず、しかも皮肉にも、大革命の影響を強烈に受けたがゆえに神聖ローマ帝国は解体し、ドイツはかえって多数の領邦国家として分立しつづける破目に陥っていた。したがって、自由・平等・友愛とは別のところから国民統一のナショナリズムがわき起こり、プロイセン国王はその旗頭となりつつあった。また、産業革命もようやく緒についたところであり、職人のプロレタリア化も格段におくれていた。したがって労働者階級とその運動も、まだ旧来の熟練職人とその運動から分離してはっきり識別できるものとして登場してはいなかった。

その後進的なドイツで成長した若き批判者マルクスがいや応なしに対面したのは、封建的な骨格を残したまま近代化の担い手として急速に肥大化しつつあるプロイセン国家であった。かれはその検閲とたたかい、民主化を要求した。ようやくのちになってから森林盗奪の問題を扱うことを機として社会問題へ眼をむけはじめる。だが、パリへ出るまでの時期にマルクスが執筆した論文は、ほとんどすべて国家に関するもの、その不正、不当な行動を批判、弾劾するものであった。かれの関心が政治活動へ集中していたことが知れる。この思考様式、行動様式はまさに典型的な急進民主主義者のそれであった。それと対照的に、労働者といわずおよそ民衆の社会運動については、まるでふれるところがなかった。運動論の不在が、そもそもの出発からマルクスのウィーク・ポイントとなっていたことは間違いない。

このマルクスにとって、国家についてはおぼろげな観念しかもたず、しかも場合によっては資本家の存在意義さえ認めたうえで、一見生ぬるい社会運動の積み重ねによって社会変革を漸進的にかちとっていこうとする運動論、あるいは運動論そのものが肌に合わなかったのであろう。

国家権力に当面の目標をしぼりこみ、政治革命を実現し、その革命独裁を論じていっきょに協同社会を創出しようとする共産主義に魅かれたのも自然な成り行きであった。しかも、旧来の共同体的諸関係の解体のおくれたドイツでは、私有財産と貨幣に対する原理的反撥も強いものであったろう。そしてマルクスが潔癖に貨幣を攻撃しながら具体化しようのない機械制大工業を軸とする全体的なアソシアシオンを構想するとき、現実の社会運動の達成しうるものはほとんど取るにたりないものに映ったはずである。それだけますます政治運動、なかんずく蜂起―革命がいっさいを解決する処方箋として魅力を増したものと思われる。

プロレタリアートの思弁的概念性

以上で浮かび上がったマルクスの革命観の性格は、われわれを最後に、マルクスが革命の主体として考えた〈プロレタリアート〉の吟味へとむかわせる。

マルクスが革命の主体として考えた〈プロレタリアート〉は、じつは、社会主義者たちが考えた現実あるがままの労働者階級ではなかった。それはまず、産業革命をへた工場労働者であったし、しかもゾレンとしての、すなわち階級になるものとしての労働者のことであった。これはきわめてユニークな主体の設定であったといえる。共産主義の思想の系譜にはむろん先行者はなく、社会主義思想をも突きぬけた超モダンな主体設定であった。

『共産党宣言』は、プロレタリアートについてつぎのように主張した。

「現代、すなわちブルジョアジーの時代は、階級対立を単純化した……。全社会は敵対する二大陣営に、直接に相対立する二大階級に、すなわちブルジョアジーとプロレタリアートに、ますます分裂していく。」

「従来の中間身分の下層、すなわち小工業者や、小商人や、小金利生活者や、手工業者や、農民、これらすべての階級は、プロレタリアートに転落する。」

機械制大工場における搾取と支配の強化が労働にもたらす諸結果を要約したうえで

「プロレタリアートはさまざまな発展段階を経過する。……／最初は個々の労働者が、次には一つの工場の労働者が、その次には一地方の一つの労働部門の労働者が、彼らをちょくせつ搾取している個々のブルジョアとたたかう。彼らはその攻撃を、ブルジョア的生産諸関係に向けるだけではなく、生産用具そのものにも向ける。」

「だが、工業が発展するにつれて、プロレタリアートの人数がふえるだけではない。彼らはまた、ますます大きな群によせあつめられる。……機械がますます労働の差異を消滅させ、また賃金をほとんどどこでも一様に低い水準におし下げるので、プロレタリアート内部の利害や、彼らの生活状態は、ますます平均化されてくる。……個々の労働者と個々のブルジョアとの衝突は、ますます二つの階級の衝突という性格をおびてくる。労働者はブルジョアに対抗して同盟をつくりはじめる。彼らは、その労賃を維持するために力を合わせる。いつか反抗に立つための準備として、永続的な結社を支えつくる。ときには闘争は暴動となって爆発する。」「どこでも一様な性格をもっている多くの地方的闘争を一つの全国的闘争、一つの階級闘争とするには、結びつきさえあれば、それで十分である。そしてあらゆる階級闘争は政治闘争である。」「プロレタリアが階級に、それとともにまた政党に組織されていくこの過程は、労働者そのもののあいだの競争のために、たえずくり返し打ち砕かれる。だがこの組織は、いつでもいっそう力づよく、強固で、有力なものとなって復活する。」(25)

産業革命をつうじた資本家と工場労働者という敵対する二大階級への両極化、それに労

エンゲルスとマルクス一家

働者の賃金、利害、生活状態の一様化、平均化という収斂の展望が鮮明に描かれていて、そのうえに一つの階級闘争への煮つまりが階級形成の必然性として、そしてまた運動論＝組織論として構想されていたわけである。

だがまず第一に現実の労働者階級は、すでにみてきたとおり、市民社会にまだ包摂されない領域に自律的な生活圏、生活文化をもつものとして登場してきていたが、ギルド的伝統を引いた熟練職人と農村をくいつめた流民という、源泉を異にし気質や行動様式を異にする、二つの集団に大別されたのであり、さらに主として後者の一部が、熟練をあまり要しない工場労働者へと転化しつつあった。ところがマルクスは、現実に即したそのような幅と多様性をそなえたプロレタリアートをみるのでなく、一様な機械制大工業労働者への収斂論を極端な形で提起したのである。そのことには、社会に対する産業革命の破壊力、ひいては資本の分解力を誇大に受けとってしまったというそしりをまぬかれないであろう。そして主として流民、貧民層から供給されたあまり熟練を要しない、したがってまた団結の伝統の薄い工場労働者に主体をしぼった以上、その運動論＝組織論から遠ざかったのもある意味で当然だったろう。

しかし、第二に、そのような工場労働者の主体性については、ビュシェ以来、当時の理論家や運動家のなかに慎重な判断がおこなわれていた。すなわち、いきなり労働手段を共有するアソシアシオンをつくることは無理で、資本家を前提にした、あるいは人民を代表する国家を前提にした協議組織としての「労働の組織」が構想されていた。労働組合的なも

の原型である。ところがマルクスは、この慎重さを学ぶことなく、階級形成論という名の底ぬけの楽観主義を対置したのである。現実には運動的主体性におくれをとっていた工場労働者が、政治革命を通じて共同体原理主義の共産主義社会を建設する主体、そのような任務を自覚して担う単一の階級に形成されてゆく主体にまで高められてしまった。

マルクスがこうしたユニークな主体論をもつにいたったのは、やはりかれがドイツ人であったことを考えないわけにはいかない。

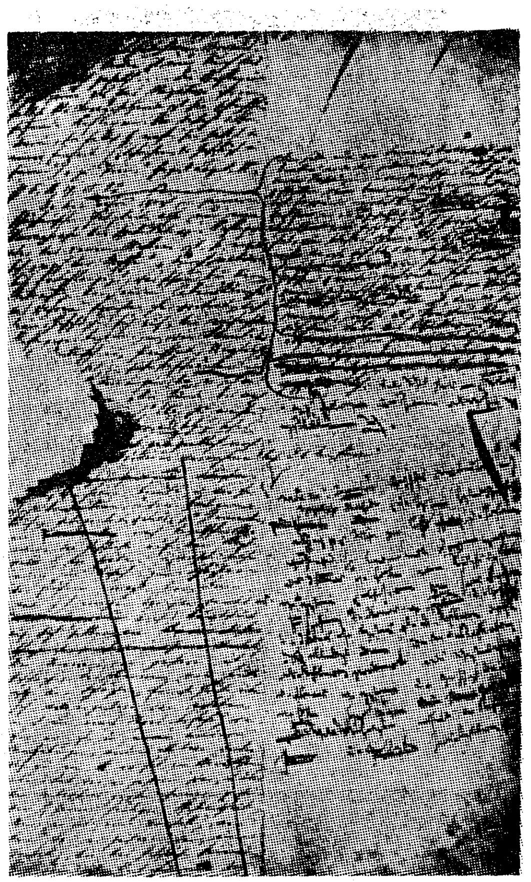
一つには、ドイツの職人のプロレタリア化は、イギリス、フランスのそれに比べ、いちじるしくおくれていた(26)。マルクスが小手工業者を一般に反動的な独立小生産者としてみる観方に傾いた背景には、この事情があった。後進国の現実に住んでいた者ほど純粋な発展を描きがちなのである。だがなんといっても、ローレンツ・フォン・シュタインのプロレタリア概念の影響が注目されよう。

シュタインは、一八四二年九月に刊行した『今日のフランスにおける社会主義と共産主義』において、フランスの社会主義、共産主義を紹介するに先立って、彼独自のプロレタリアート論を展開した(27)。彼によると、「教養も財産も所有していないが、人間にはじめて価値を与えるこのような財貨をまったくもたずに終ってしまう運命ではないと感じている人々の階級全体」がプロレタリアートであった。彼はこの定義によって、プロレタリアートを古代以来の貧民から区別した。プロレタリアートをプロレタリアートたらしめる階級意識は、フランス革命によって勝利した「人格の理念」「平等原理」と「私有財産」とのあいだの矛盾対立のなかから生まれてきた。所有権に対する疑念が頭をもたげるところには無産者のあいだに社会的な権利意識が広がる。こうして「貧しい、働き、苦しむ階級から、強力な、総てを否定し脅かす統一体、プロレタリアートが生まれる。」

出現した現実の労働者の生活と意識のありようが具体的にとりあげられるかわりに、大革命の理念の矛盾からプロレタリアートの階級意識が演繹される。それはフランスの社会主義者たちの大革命総括とは異質なものであり、むしろ大革命の普遍的理念に甘いだけ共産主義者バブーフ、ブランキのそれに近い。現実の労働者の、労働力商品販売者としての性格も工場労働者としての性格も、すっぽり落ちてしまっている。したがって、シュタインのプロレタリアートは、貧民の境遇に甘んずることを拒絶した貧民というようなものである。しかし、いずれにせよ、プロレタリアートは、自己の存在を含めて「すべてを否定し」ようとする階級意識によって、はじめてプロレタリアートとなるのである。

ここには明らかに一つの顚倒が生じていた。あるがままの労働者階級の階級的共感、連帯感がその限界ともども階級意識として語られるかわりに、「すべてを否定する」変革者としての階級意識が〈生成するもの〉として思弁的に押しつけられていた。むろんフランスの社会主義者たちや労働運動家たちも階級対立とそのなかでの労働者の利害の根本的同一性を語り、団結を訴えた。その意味では、階級的使命観、ゾレンをもっていたといえよう。しかし、私有財産と貨幣に対する彼らの否定はけっして原理主義的な即時全否定ではなかったし、また労働者側の団結も、一への融合というものではなくて、個の契機を大切にした結合、連合が構想される傾向が強かった。そこには、現実の労働者のあり様についてのたしかな理解が出発点になっていたといえる。ゾレンも現実からのゾレンであり、超越的な理念としてのゾレンではなかった。シュタインにおける顚倒は、イギリス、フランスとは異なり、現実の労働者階級がまだ登場していなかったのに概念だけがさきに入ってきたドイツにおいて、知識人のあいだに起こりやすい顚倒であったということができる。

壮大な体系的思弁にたけた青年ヘーゲル学徒たちはこのシュタインの著作に飛びついた。マルクスもその一人であった。一八四三年末から四四年一月にかけて執筆された『ヘーゲル法哲学批判序説』のなかにはじめて、プロレタリアートがいっそう思弁的な概念として登場する。それは、ヘーゲルの「普遍的階級」の批判のうえに新しく、「時代が社会の一般的意識の主体たることを志向する一階級を生み出す」(28)ものとしての「普遍的階級」であり、「私的所有の否定」、つまり「社会がすでにプロレタリアートのための原理としてしまったものを、社会の原理として主張する」(29)のである。マルクスはパリ滞在後、苦い自己批判をこめて、ドイツの「真正社会主義」へのはげしい批判に乗り出すことになる。しかし、そのさい鍵となるプロレタリアート概念についてまで、マルクスの洗い直し作業はついに及ばなかったのである。



ドイツ・イデオロギーの草稿

(1)　『経済学批判』『全集』第一三巻、五ページ。
(2)　吉田静一『サン、シモン復興』一五七～六〇ページ。
(3)　D・マクレラン『マルクス主義以前のマルクス』西牟田久雄訳、七五～七ページ。
(4)　坂本慶一『マルクス主義とユートピア』六三ページ。

(5)　同右、六四～五ページ。
(6)　前出『共産党宣言』四八八ページ。
(7)　同右、五〇四ページ。
(8)　陸井三郎訳『プルードン』Ⅰ、三四三ページ。
(9)　『共産党宣言』第一章をみよ。
(10)　同右、四九六ページ。
(11)　同右、四九五ページ。
(12)　同右、四八八ページ。
(13)　前出「共産主義の原理」三八八、三九一ページ。
(14)　この点の理解にはウォラーステイン『近代世界システム』Ⅰ、Ⅱ、川北稔訳ならびに『資本主義世界経済』が示唆に富んでいる。
(15)　前出『共産党宣言』五〇三ページ。
(16)　同右、四八六、四八八、四九五ページ。
(17)　同右、四八六ページ。
(18)　前出「共産主義の原理」、三八九ページ。
(19)　前出『共産党宣言』、四八四ページ。
(20)　広松渉・片岡啓治編『マルクス・エンゲルスの革命論』四八～五一、六六～七〇ページ参照。
(21)　『共産党宣言』、四八四ページ。
(22)　同右、四九八～九ページ。
(23)　同右、五〇六ページ。
(24)　マルクス『独仏年誌』からの手紙『全集』第一巻、三八一ページ。
(26)　J・ルール「職人の態度」二二ページ。
(27)　以下シュタインのプロレタリアート論の紹介は、谷口健治「ローレンツ・フォン・シュタインにおけるプロレサリアートの概念」(『思想』一九八二年三月号)による。
(28)　S・アヴィネク『終末論と弁証法』中村恒矩訳、七一ページ。
(29)　マルクス「ヘーゲル法哲学批判序説」『全集』第一巻、四二七ページ。

むすびーマルクスの相対化のために

フランス社会主義との関連においてマルクスによる革命観の選択の意味を明らかにしようとしたが、当初第五章に独立して扱うことを予定したプルードンについて、時間と紙幅と両方の事情で割愛することになってしまった。マルクスの相対化のための鍵はプルードンにあるともいえるので、残念である。次の機会に補足したい。

また、その点を措いたとしても、書き終った今、フランス社会主義諸思想そのものの位置づけをもっと思想史的に深めなくては、との想いに強くとらえられている。とりわけ、大革命の自由・平等・友愛の理念の批判、継承の関係をもっと広い視野から解明しなければならないと思う。こんごの課題としたい。

マルクス自身の革命観については、いうまでもなく『共産党宣言』前後における革命観の選択だけを検討すれば十分というわけにはいかない。本格的な経済学研究、資本制生産に先行する諸形態の研究、そしてパリ・コミューン、特異な一八七三年恐慌などをへるごとにマルクスの考えは発展変化していくからである。革命観についてもフォロー・アップが必要であろう。だが、私の現在もっている感触では、こと革命観については、マルクスの考えの変化は大きくない。『共産党宣言』で確立された原型は保持されていたと思われる。この点についても、機会を改めて取り組むこととしたい。

ドイツ語版『資本論』初版の扉

表紙のことば

「1、2、3、4、」と声をあげながら水の流れを数えていると、突然、「2、3、4」「3、2、1」などと、水はその流れを変奏する。それでも水の流れは「不可視の法」に柔順に見える。

水車が水の流れを必要とする以前の、水自体の回転軸とその触覚を知ること……などと道具の概念と起源を検証することが、あらたに見るということを発見する道具としての美術の、あるいは概念の芸術の見えざる法だとも思える。

1987年1月15日発行　第3種郵便物認可

編集　『前衛』編集委員会
発行人　高橋一雄
発行所　現代企画　☎03－293－8564
東京都千代田区神田神保町1－64
神保町ビル203号　振替東京5-44589
購読料　4100円（年間〒共）
5600円（密封･年間）
定　価　300円